婦人と子ども

第三卷第六號

謹告

本誌は、婦人教育及家庭教育、其他緊要なる各種の問題に關して、讀者相互の質疑應答を掲載す、但讀者の應答なき時は、記者之に應ずるものとす。

本誌は一般讀者の寄稿を歡迎す。殊に家庭の日誌、各地に於ける婦人教育幼兒保育の狀態、婦人問題、婦人兒童の遊戲、手毬歌、子守歌等に付きては、詳細なる報告を望む。但質疑投稿は、凡べて左の規則によることとす。

一、用紙は、白紙二つ折、字詰は、半枚十行廿二字詰、體は楷書。

一、一事項毎に別紙を用ひ、別口に住所氏名を記入せらるべきこと。

一、原稿は、一切返附せざること。

一、封書の表には、凡て婦人と子ども投稿と明記せらるべし。

一、投稿にして、有益と認めたる時は相當の謝意を表することあるべし。

一、照回は往復はがき又は返信用切手封入のこと。

發行　毎月一回五日發行○第一卷第一號明治廿四年一月二十日發行

定價　一册金拾錢○六册前金五拾七錢○拾貳册前金壹圓拾錢○郵稅各一册一錢○切手代用は壹割增但壹錢切手に限る。

入會者　は會則御承知の上にて東京女子高等師範學校附屬幼稚園内フレーベル會あて申し込まるれば雜誌は無代價にて送呈すべし

購讀者　は總べて前金にて東京日本橋區本石町三丁目二十三番地金昌堂へ御注文のこと○送金は神田今川橋又は日本橋室町郵便取扱所受取人金昌堂あてのこと○見本は切手(壹錢に限る)十二枚封入にて申し越されたし○前金相切れ候節は赤にて●印を御姓名の上に附し候に付き早速御送附下されたく御入用なき時は御斷り下されたく候○轉居の節は新舊共に御通知を乞ふ

編輯　に關する御照會及原稿御寄贈はすべてフレーベル會あてのこと

廣告料　一頁拾圓。半頁五圓

明治三十六年六月二日印刷
同　年六月五日發行

不許複製

發行兼編輯者　東京市本郷區元町二丁目六十六番地　江崎政芳
印刷者　東京市神田區錦町一丁目十九番地　日下主計
印刷所　東京市神田區錦町三丁目二十五番地　熊田活版所
發行所　女子高等師範學校附屬幼稚園内フレーベル會
發賣所　東京市日本橋區本石町三丁目廿三番地　金昌堂

大賣捌所　東京　東京堂●同東海信文合資會社●同北隆館

婦人と子ども第參卷第六號目次

子ども

百合姫（やまとの翁）●伊蘇普物語（牧羊譯）●簡易英語●ころんぶすの卵（牧羊）

家庭

家庭に於ける美的教育……谷川清
婚姻……その子
家庭閑話……石井泰次郎
今昔いろは料理……清家惠子
兒幼偏性の豫制に就きて……松本孝次郎

學術

幼兒の想像に付きて……同人

史傳

大題小題二、サーモピレーの戰……米溪
織田信行の侍女勝子……布士廼舍

文苑

夕早苗……竹相會同人
首夏二首……布士廼舍
常夏……同人
夢に子規を聞く……同人
藤衣……驚水
旅……布士廼舍
葉櫻……つねを

說林

幼稚園保姆と母の責任……タッピング夫人

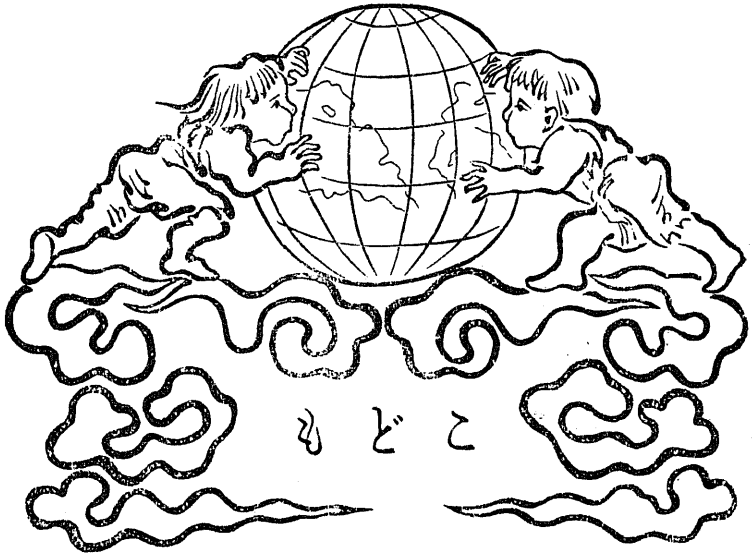
雜錄

花のかたみ……や、て、
讀書餘錄（フロレンツの獅子）……擊水
東京より……女子高等師範學校附屬幼稚園
幼稚園の遊嬉……平岩繁治
相摸の子守歌……平岩繁治

彙報

女子高等師範學校●華族女學校運動會●慈善音樂會●東京盲啞學校卒業式●大阪市に於ける保育大會●清國幼稚園●本會例會●西藏の風習●露國小學生徒の修學旅行●北海道通信

婦人と子ども
第參卷第六號



百合姫（つゞき）

やまとの翁

あまりの恐さ怖ろしさに百合姫は　思はず叫び出さうとしましたが、どうしたのでしょー　聲が出ません。仕方がないから、起ち上って逃げ出さうとしましたがどこを見ても　週圍が、丸で　荊棘の木で取りかこま

れて居るから　どこへも逃げることが出來ません。　あゝ、困った、誰か助けにきて呉れる人がないのか知ら　と思って、不圖、側を見ると、其處に一本の古い樫の大木があって、いゝ鹽梅に、根の方が大きなウロになって居ます。仕方がないから、百合姫は　夜になると其中に這入って眠ることにして、夫から雨でも降ったり　大風でも吹く時には、又其中で避ける事にしました。食べ物といって、別に何もありませんから、草の根だの、實だのを取って來て食べるより他に仕方がありません。夫から又秋になると、其處らへ出て　澤山木の葉を集めて來て、木のウロの中に積んで置いて、冬寒くなって　雪でも降る時分には　其中へもぐり込んで身體を温めます。もー　百合姫の立派な衣服

は、すっかり　ボロ〳〵になって仕舞ひましたから。

可愛相じゃありませんか、百合姫はこんなにして、寂しい〻〻荒野原で、たった一人で、こんな難儀な目に遭って居ます。

所がある年の春、この國の殿様が、此野原へ狩りに來て、だん〳〵と鳥を追って、とう〳〵百合姫の居る場所へ這入り込んで來ました。そして、ひょいと大きな樫の木の下を見ると、そこに美い百合姫がじっと　座って居るのでしょー。殿様は吃驚して、

『まー、お前　どうしてこんな寂しい所へ來たんだ』？

といって尋ねましたが、姫は何んとも答へません。夫も其筈です。あの時から　もー悉り　唖になって居るのです。そこで殿様は、どうにも可愛相でなりませんから、百合姫をば一所に馬

に乘せて、とー〳〵御殿へ連れて歸りました。それから、殿樣は、美しい衣服を着代へさせたり、甘しい物を食べさせたりして、いろ〳〵と大事にしましたが、何時までたっても百合姫は口を利くことができません。それでも、中々奇麗なお姫樣でしたから、暫くたってから、殿樣の奥樣になりました。

夫から一年ほどたって、百合姫に一人のお子さんが生れましたが、丁度其晩のこと、姫が一人床の中に休んで居ると、どこからとなく守り神樣が其部屋に這入って來て、百合姫に申します。

『さー眞實のことをおいひ、お前、わたしの禁て置いた門を開けたに相違なからう、さ、お前の口を開けて物言へる樣に

して上げるから、すぐ白狀なさい。何時までも、强情ばって言はないなら、仕方がないからお前の子を取って行くよ』と言って神樣は　姫の口を物言へる樣にしてくれましたが、姫はどこまでも强情です。

『イーエ　私しはあの門は明けやしませぬ』

此返事を聞くと、守り神樣は、不意　姫の抱いて居た赤ん坊を取って、どこかへ消えて仕舞ひました。

さて、翌朝になると、子供が見えぬといふので御殿中は大騒ぎになりました。何でも、これは奥樣の仕業であらう。奥樣が御自分で殺したに違ないといって皆で　密々話しあって居ります。所が姫は夫を聞いても、悲しい事には　何も言ふ事が出來

ない。然し殿様丈けは、夫でも決して奥様のした事とは信じませんでした。

それから、大分過ぎてから、又一人お子さんが出來ましたが、其晩に又、守り神様が姫の前に出て來て申します。

『眞實の事を言はないか、白狀すれば子どもゝ返してやるし、物も言へる様にしてやる。夫でもまだ知らぬといふなら今生れた子も連れて行くぞよ』

けれども姫は强情です。

『イーエ　私は決して門を明けませぬ』

すると守り神様は、いきなり又赤子を引っさらって、飛んで行きました。

そこで翌朝になると、又大變な騒ぎになりました。これはどうしても、奥様が自分で殺したのだといふので、家來どもは、と一〳〵殿様に申し上げて、何でも奥様を一度　べて見よーと言ひ出しました。けれども、殿様は、よもや奥様がそんな事をなさらうとは信じませんから、　來の言ふ事は用ゐませんでした。

所が　其翌る年に奥様は　又可愛いゝ女の子を生みましたが、其晩も亦守り神様がやーて來て『まー　こちらをご覽』といって　神様が御自分で抱いて居らしゃった二人の子を姫に見せて、

『これでも　お前まだ白狀する氣にならないか』

といひましたが、姫はどこまでも　强情です。

『いーえ　私しは　存じませぬ』

そこで　守り神樣は　又其女の子を引っさらって消えて仕舞ひました。

さて翌くる日になりました所が、今度は　もー大勢の家來どもが　承知しません。

『奥樣は人殺しだ、御自分の子を三人までも殺した、どうしても所刑にせねばならぬ。』

といふのです。三度が三度まで、子供を失くしたのですから、殿樣も　今度はもー辯護の仕樣がありません。そこで、愈裁判が始まりましたがどうしたって、百合姫は口が利けないのですから、言ひ開きも何も出來るものでない。可愛相に、とー〳〵火炙りの所刑にせられることになりました。

さて、いよ〳〵所刑の日になりますと、所刑場にはうづ高い程一面に薪を積みかさねて　其上には百合姫が樫の木に　しっかりと縛りつけられて上せられて居ます。やがて定の時が來ますと、其下から一度に火を附けたもんですから、黑煙は一面に空に舞ひ上って　お日さまでが　眞黑く見える樣になりました。所が今燒き殺されよーとしました其瞬間になりますと、さしも今の今まで鐵の樣に强情だった姫の心も忽ち解け初めて、嗚呼惡い事はせぬものだと氣が付いては、今迄僞をついて居た事が　無性に恐くなって『せめて死ぬ前に　門を明けた事を白狀したいものだ』と心の中で思ひました。すると不思議にも、姫の舌が動いて來た。夫で思はず

『オー　我が守り神様よ、今こそ白狀します』

と叫び出しました。そーしますと、今迄晴れ渡って居た空が急に曇って來たと思ふと　俄に大風がピューッと吹いて來て、大粒の雨が　ザー／＼ッと降り出して今に燃え上らうとして居た火を　すっかり消してしまひました。

夫から又元の樣に空が　晴れ渡ったと思ふと、今度は　眩ゆい程の御光が空一面に光り輝いて、其中からあの柔しい〳〵守り神樣が、降りて來ました。其側には、百合姫の二人の子供が音なしく　立って居て、一人は神樣の懷に抱かれて居ます。そこで神樣は、此三人の子供を百合姫に渡して　夫から姫の舌もゆるめて下すって次の樣に仰いました。

『惡い事をしても　後悔して其罪を白狀さへすれば　屹度許されるのだよ』

（おしまい）

十二

ねづみとるくふー

ねづみの、はいれるくらいな、あなの、あいた、かねのはこを、こしらへて、そのなかにごちそーを、たくさんいれておくと、よる、ねづみが、そのあなから、はいって、よくばってあるだけのごちそーを　みんなたべるから　とー〳〵おなかがふくれて　もとのあなからでられなくなって　つかまりやすとさ。

其二十　仔鹿と母親

小さな仔鹿が或時母親に申しますには、『おつ母さんは犬から見ると大きくはあるし、速くはあるし走ることも甘いし、おまけに二本の角もあれば大丈夫でないか、夫におつ母さん、いつでも臘犬どもを一目見ると、まーあんなに狼狽て逃るのは、どうしたものです』すると母鹿はニッコリ笑ひながら答へました。『全くお前の言ふ通りだよ、夫は私百も承知して居る、けども私はね、一匹でも犬の吠える聲を聞くと、もー弱つて仕舞つて、一生懸命に逃げたくなるのだもの』

口前の議論は臆病者に勇氣を與へることが出來ない。

其二十一　驢馬と狐と獅子と

驢馬と狐とが互に自家の利益を保護する目的から攻守同盟を結んで、他獸を狩りに山へと出かけました。所が出かけると間もなく一匹の獅子に出くはしました。狐は危險の迫つたと見て取つて、すぐ獅子の側近く倚つて、若し私を見逃がして呉れるといふことなら、あの馬鹿な驢馬を生擒にして進ぜませうと申し出した。獅子は夫を聞いて、然らば其方丈は許し遣はさうといふ事になつたので狐は驢馬を連れて行つて、とう〳〵計略で以て深い〳〵陷穽の中へつき入れて仕舞ひました。夫まで獅子は默つて狐のする事を見て居つたが、もー驢馬は逃げつこなしと決つたので、すぐ狐に跳りかゝつて、たゞ一口に食つて仕舞つて、其後でゆる〳〵と又驢馬の御馳走に預りましたとさ。

其二十二　蠅と蜜壺

臺所の隅に蜜壺が、ひっくり返って居た所へ、澤山の蠅がいー香を嗅ぎつけてやって來て、蜜の上に留って腹一杯食って居ました。さて歸らうとした所が、皆脚が蜜にクッついて仕舞って飛ぶことも出來なければ身動きも出來ない、もー皆な死ならとする際になって一度に叫び出しました。『まー何んと我々は馬鹿な動物だったじゃないか、少し許の快樂の爲に今に死なねばならなくなったとは』

其二十三　牝獅子

或時野の獸どもが倚ってたかって議論をしました一体一度に一番數多く子を產むことの出來る獸は誰だらうといふ議論だが中々決らないので、手っ取り早く牝獅子の所に行って裁判して貰うのが第一だといふので皆で揃って牝獅子の前に出かけました。だん〳〵話して居る中に、『夫はさて置き、あなたは一度に何匹お生みになりますか』と聞くと、牝獅子はニッコリ笑って『何だって！分らないじゃないか、妾はたった一人さ、けども其一人といふのはね、まったく立派な獅子の子だよ』物の貴さは、數にあらずして其物の價値にある

●簡易英語

Book. 本　Pen. ペン　Fable. 寓言

Brug me that book and pen.

あの本とペンとを持っておいで

What book is that ?

それは何の本ですか

It is Æsop's fable.

伊蘇普物語の本です

Whose is that?
誰のですか
It is mii.
私のです

ころんぶすの卵

牧羊譯

亞米利加といふ國は、皆さん御存知の通り、歐羅巴の各國から比べると、極新らしい國で、今から凡そ四百年程前、ころんぶすの發見した國でありますが、其のころんぶすが、此國を發見するに付いて、どの位辛苦艱難を嘗めたかといふ事も、皆さんは歴史だの讀本だので、お讀みになつたらうし、又兄さんや姉さんから、お聞きになりましたでしよー。夫に付いて、こゝにころんぶすの卵といふ面白いお話があるのを御話致しましよー。さて、彼のころんぶすが、何でも歐羅巴の反對の側に人の知らない大陸のあることを信じて當時の學者だの貴族だの其他國民殘らずが反對したり、嘲弄したり、冷かしたりしたのも顧みないで、船出をして、海の上でも種々な辛苦艱難に出遭つたが、とう〳〵一切の困難に打ち勝つて目出度、本意を達して歸國した時に、西班牙國の大僧正で、めんどつあと申す人が、ころんぶすの爲に、お祝をしやうといふので、其國の貴族だの、名高い學者だのをも殘らず招待して、大宴會を開きました やがて、皆集まつて、宴會が始まつた時分に、僧正は眞中に立つて、今度ころんぶすがなした所の大發見といふものは、これまで、一人でやつた事業の中で、一番大きな功績である、此功績といふ

ものは、世界の續く限り何時までも消滅することの出來ない立派なものであるといつて、盛にころんぷすを賞讃しました。

所が此賞讃の演說が、ひどく其席に集つた貴族だちの機嫌にさはりました。『何んだ、ころんぷすなんて、位も身分も有たない、謂はゞ浪人じやないかこんな浪人風情に向つて、今の僧正の演說はどうだ』といふ樣な、申さば嫉妬の考が、言ひ合はしはせないが、殘らず貴族たちの腹の中に起りました。そこで、とう〳〵一人の貴族が、口を開いて、『我輩の考では、所謂新世界への航路を發見するのは、夫程困難じやなからふと思ふのだ、太洋は廣々と見渡す所に廣がつて居るじやありませんか、して見れば、西班牙の水夫どもは、誰だつて航路に迷ふといふ樣なことはありやしないさ』

すると、今迄は默つて居つた連中が、此言葉を聞くと同時にさも心地よさ相な大聲で、一度に『ワハハッ、、、』と笑ひ出して、『無論そーさ、誰だつて知つて居るさ』と叫んだ。

ころんぷすは、始から何もいはずに、聞いて居ましたが、此時靜かに口を開いて

『前程の大僧正の賞辭は、とても私の當る所ではありません。私はたゞ上帝の導きに由つて得た丈のことで、世界中の人は誰でも、上帝の助さへ得たらば出來る丈けの事をしたまでゞあります。』

といひながら、食卓の上にあつた一個の卵を取り上げて、前に口を開いた貴族の一人に向つて、『時に閣下、閣下は、此卵を倒れない樣に縱に眞直にお立て遊ばすことが出來まするか』と尋ねたので、其貴族は直に卵を取つて、上下種

々にやつて見たが、どうしても立たぬ。そこで其隣りに座つて居た貴族も、『どーれ我輩が』といつて、やつて見たが、矢張立ち相にない、すると周圍から、僕が、我輩がといつて、澤山よつて來て皆思ひ〳〵に試して見たが、どうにも立ちつこなしなので、其中の一人が、

『こりや、駄目だ、どうしたつて出來やしない、諸君はそんな出來ないことに骨を折つて居る』

と言つて、とう〳〵皆手を引きました。

そこで、ころんぶすが申しました。『然し、諸君はすぐ後では「無論そーさ、誰だつて知つて居るさ」とおいひなさるに違ありますまい』と、こう申して、其卵を取つて、コツンと軟く食卓の角でたゝいて、卵の尖端を少し凹し、さて其凹んだ所を下にして、食卓の上に立てました所が、前の貴族は

『はゝー、そーか、それなら誰だつて知つて居るさ』と申しました。

此事があつてから、人のした發明を見て、何でもない樣に云ふ事を、「ころんぶすの卵」と申す樣になりました。

家庭

家庭に於ける美的教育

一方に於ては『花より團子』などいつて、極めて沒風流な、實利的な、非美的な俚諺を有て居ることは居るが、一體からいふと、我國人は美の好尚が一般によく發達して居るといつて宜しからふと思ふ。美の好尚の發達しない人は、格別夫がために、例令ば道德の發達しない人の樣に、世に處することが出來ない譯ではないが、どつちかといへば、人品に餘裕がなくて殺風景である。美の好尚の發達しない國民は同じく國民としての品格に餘裕がなくて殺風景であるといふ樣な譯であるが、其點からいふと、我國民は、一體に風流な、美的品格を具備して居るといつてよい。世の進むに從つて、人は益々實利的となり沒風流となるのは致し方がないが、其結果から考へると、頗る憂慮すべきであるまいか。

そこで、教育の方では、益々美的教育の必要が認められる。が併し、實利的傾向の盛な世では、學校などに於ける美的教育はどうしても比較的に輕視せられるのは致し方がない。だから、家庭で以て、十分に此點に於ける缺陷を補ふことを勉めねばならぬ。

美的教育は、重に感情の方面に屬するから、家庭でも、主として感情的時代の幼兒の時から始めた

いと思ふ。此點からいふと、我國の家庭教育で注意すべき所が甚だ多からうと考へる。何故かといふに、身体や道德や智識の側の方は、隨分に考へられる樣になつては來たが、我國民の一般の好尙ともいふべき美的の方面は、餘程忽諸にせられて居る樣に考へられるからである。一家の主人など一幅の畫に、百金千金を惜しまない人も、子供の夫の爲めに少しも費す所はない。といつて、美的好尙を養ふことは、華奢贅澤といふを丶は違ふ。そこで、吾等の希望する所は、家庭教育の時代に在りては、成るべく此方面の注意をも拂つて欲しいと思ふのである。彼の草花を培養させたり、顏料を供して圖畫を隨意に畫かせたり、樂器を備へて音樂の趣味を養つたり、其他幼稚園でする樣な種々の細工物などの材料を與へてやつたりすることなどは、之が方便として最も有効だと思ふ。

婚姻

谷川清

婚姻と一口に申しますと其の意義は明瞭であつて別段に說明を要しません樣で御座りますが、事實上の婚姻は兎も角も法律上の婚姻も一寸理解り惡い處もありますから極く大略を記述致しませう。

新民法第四編親族の第三章に婚姻に關する規定が掲載致してありますが、是等は後日時期を得ました節に順次記述致すことに致しまして、唯今は先づ婚姻の意義を說明致しませう、

○夫と申しましたり、妻と申しますのも共に法律に適ふ即ち適法の婚姻に因りて創めて設定せられる所の男女間の身分を謂ふに過ぎないのです、然し

婚姻と申します語には二つの意義が御座りまして其第一の意義は夫妻たる身分上の關係を創設致しまする要式の行爲を表示致しまして、第二の意義は夫妻たる身分上の關係自体を表示致しまする、約言致しますと第一の意義は一時的の事實を云ひ表はしまして、第二の意義は繼續的の事實を云ひ表はします、我國では從來の慣例上第一の意義に用ひて居りますが、嚴格に申しますと、第一の意義を結婚と申しまして、第二の意義を婚姻と申しまするのが宜しいかと存じます。

夫妻たる男女が同等の地位を占むる樣になりましたのは實に近世の事でありまして、歴史上に婚姻制度の沿革を尋ねますと、昔時野蠻の種族が所々方々に部落をなして割據して居りました時代では或る部落の土蠻は或る他の部落の土蠻を浸擊して婦女を掠奪して參りましたり、又部落中でありましても、婦女を見る時は數人の男子は互に鬪爭致しまして、結極の勝者が其の婦女を占有致しまする樣な次第でありました、即ち掠奪婚の時代であります、此の時代には婚禮などと云ふものは御座りませず、唯情慾の發動する儘に任せ掠奪を致しますのでありますから、勿論婦女の方にも貞操を守ると云ふ樣な觀念は毛頭ないのです、當時の社會も亦別に之を要求致しませんでした、ですから自然母系のみ明らかで男系は少しも明確致しませんでした、露骨に申しますと父親を知るのには甚だ困難の事で御座ります、其後掠奪婚の遺風が漸く衰へましたが、家事に使役致しまする目的で婦女を買得し、男子の所有物と致しまする樣な思想が發達致しました婚姻は全く普通の物品同樣に賣

買に依りまして成立する狀態になりました、其の方法は妻たるべき者の親と夫たるべき者又は其の親との間に賣買が成り立ちまして婦女の方は更に之を知らないのです、いや知らさないのでした、賣買婚の時代とは此の時代を云ふのであります、此の時代で最も甚だしい一例は婦女に定價を付けた法律がありました、アイスランドの古法に「少なくとも一「マルク」の代價を以て婦女を購求したる者に非らざれば法律上正當の婚姻を爲したる者と認めず」云々とありますが今日で聞けばあつと驚く外はないのです、

社會の風俗が公義を尊重する樣になりましてから婦女を賣買物となすは背德なることを會得致して婚姻は尊屬親(父母、祖父母等)より婦女を贈與するに依りて成立するものと致しました、此の時代は唯婦女を賣買の目的物としない迄のことで、つまり贈與の目的物と致します以上は其の婦女を以て財物視するのであります、此の點は賣買婚時代と敢て異なる所はありません、我國の風習では未だ此の贈與婚の時代を全く脫離致して居りませぬと云ふ事は皆樣の能く御存じのことで御坐りませう。

近世に及びましてから婦女に人格を與ふるに至り婚姻は必ず男女雙方の共諾あるに因つて成立するものと認めます、從前の價額の名義は嫁資とか養老資產とか云ふ樣に名目を變ずる狀況を見るに至りました、即ち共諾婚の時代であります、歐米諸國を始め我新舊民法共に共諾を以て婚姻成立の一大要件と致して居ります、

以上の外共同婚時代もありました、即ち一夫多妻

とか一婦多夫とか云ふ時代であります、前述の通りで婚姻の意義は幾多の變遷を經過したる後、始めて今日の意義をなすに至つたのであります。

家庭閑話　その子

▲猿の物眞似とはよく人の口にすることなれど、眞似るは獨り猿のみならず、幼兒も中々此性質に富めるものなり、人の振りを見てそを眞似ること心からよりすることならず、從つて意志ある行爲とはいはれずとも、度重なれば、やがては惡しき習慣も善き夫も、共に之よりぞ造らるべき。

▲可笑しき話とて、友の語るを聞き侍り、何よりも菓子を嬉み給へる父君の、さすがに幼子には、この習慣を與へんことの心苦しく、さりとて自らはそを廢せんこともなし難くて、さま〳〵案じ煩らへる末、幼兒に見せまじとて、押入の中に頭をつッこみながら、菓子食ふことを始めけるに、何時の間に見たりけん、其頃より何を與へても、其幼兒、いつも〳〵押入に頭をつき入れねば、食はずなり行けりとぞ。

▲家に歸りて、何かと妻に當り散らす夫は、外に在りては權力を振ふに由なき人なり。家に在りて常に妻に壓せらるゝ夫は外に出でゝ目下の者を遇するに必らず苛酷なりと、或人の語られし。

▲落語家の講臺に上りては、いつも〳〵も可笑しき滑稽に人を笑はせ面白き顏を見せては人を喜ばすを見て、さる婦人の、あはれ、かゝらん男に嫁したらんには、家庭は、とこしへに春の海の穩か

にこそあるらめとて、やがて結婚したりし曉に至れば、思ひしことは秋の空のいと變り易くて、毎日〳〵澁面作れる夫の顏に、そも如何なる譯でと詰り問へば「さればなり、講臺に出ては、面白き顏や話に人の機嫌を取るべき身の、家に歸れば、澁面作りて保養なすも、强ち無理ならぬのことならずや」といひたりとなん。

▲妻を苛める夫こそいと心得ぬ、よし喧嘩口論理屈に勝ちたりとて、現在我妻ならずや、章魚といふ魚、漁夫に捕らはれて、我と我身を食ふとこそ聞け、かゝる夫は、之にも似たらずや。まして子供などある父の。

▲佛蘭西のルッソーといへるは名高き學者にて、其人の書きたる敎育の書など、普く世界各國の人にもてはやさるゝ程なるが、此人の素行につきては幾多の非難あるが中にも、少き折、所々に流寓して幾人かの幼兒を儲けたりしに、悉く之を養育院に送りて、自らは一人も養ふ能はず、さて云ふ樣、父たる權なき我は又父たる義務なしと、其事の理性を沒し、道德を沒し、人情を沒したるはいふまでもなし。然れども、子を儲けて然も親たるフロカルチー權能なき者は、まことに此悲痛慘膽たる言葉に顧みる所あらざるべからず。

今昔いろは料理

石井泰次郎

(て)

天狗どうふの拵方

天狗どうふとは、拵方の奇妙にして、最も手早く飛鳥の如き仕方なるより、名づけし物ならん、先

鍋四つを炭火の上に一時にかけて、第一の鍋に胡麻の油を煮たて、第二の鍋に白湯を煮たて、第三の鍋に酒を入れ、第四の鍋に醤油を入れて、一同に炭火にかけて油の煮ゆる時に、豆腐を中形に切て水を切置たるを第一鍋に入れ鋼杓子にて二三べんくる〳〵とめぐらし、直にすくひあげて第二鍋にうつし入れ、又二三べんめぐらして第三鍋に入れ、之も同樣にして第四鍋に入るべし、さて之をも同樣めぐらして、別に茶碗のうちに山葵みそなと敷おきたる上に取入るゝなり、

第一鍋に一人、第二鍋に一人、第三鍋に一人、第四鍋に一人と受持を分て四人にてなすべし、又別に一人茶碗をしかへたる人あるべし

山葵味噌の拵方は、味噌を擂盆にてすりて馬尾篩にてこして、鍋に入て砂糖と味淋酒をいれて

煉りて、ねり上る時に山葵をおろしたるを入れて合せて拵ふべし、味噌六十匁に砂糖三四十匁と味淋五匁ほど水少し入れてねるべし

手取田樂の拵方

玉子の白味ばかりを分て、鉢に入れて茶筌にてかきたつれば泡雪になるなり、之を板の上にひらたく附て、蒸籠に入てむしかたむべし、さて切形して串にさして、梅びしほ（梅干の肉をすりて砂糖を合せたるもの）をぬりつけて燒て出すべし。

幼兒偏性の豫制に就きて

清家惠子

そも〳〵幼兒は心身の發達が極めて盛でありますから、從て生理上新陳代謝の作用が餘程速かで、之れが爲めに又身体精神に刺戟を感ずることも多

く之れに由つて種々の慾望を生じます、若し此慾望を幼兒の思ふが儘に滿足せしむる時は、是等慾望の達し得べきを知る處から致して、更に之に對する慾望を生じ、度々之を遂ぐる時は遂に一の意志となるに至るものです、其中には勿論善良な意志となるものもありますけれども中には又不當の慾望を屢々遂げた結果、隨分不道德な意志を形造らせることもあります。夫ですから、どうしても子供を育てるに當つては、時には幼兒の慾望を制し偏僻なる意志の成立を防ぐことが切要になつてきます、之を豫制と云ひます、豫制に於て主とする所は幼兒をして養育者の意志に全然服從せしむることでありますが、左に其方法の二三を陳べて見ませう。

(一) 先づ幼兒の意志を變換せしむる事　幼兒は其心身の刺戟が盛ですから、物の是非善惡の區別など攝はないで、たゞ一概に思ひ立つた慾望を遂行しようとします。此際に於ては其意志を變更させて正道に着かしめねばなりませぬ、即ち不正の慾望を正しい方へ向け代へてやることで最も有効の方法であります。之に就いて注意すべき條件は(1)迅速でなければなりません。(2)どんなものに向け代へるかといふ交換物の撰擇がだいじです。

(二) 命令(若しくは)禁止に付いての注意。

(1)命令は成るべく言葉を簡單にして餘計なことはいはない樣にしなければなりません。(2)命令は一事項に關することに限ります、假令澤山な事項に關することでしても其歸するところは同一樣のものでなくてはなりません。(3)命令は確實にして、決して疑の辭を含んではならぬ、(4)命令は之を與

ふる前に於て十分考へて、一旦出した命令を直ぐ又取消すが如きことあつてはなりません。

以上の命令をするに付いて又、必要な條件があります。

甲、威嚴　威嚴と申すは督制者に存する高尚優美の風采でありまして其着實にして因循ならず、活潑にして輕躁ならず、渝らざること千秋一日の如き品性と、其剛毅果斷なる氣象は皆幼兒をして服從せしむる所の勢力即ち威嚴をなす所以であります、一家に於て父の威嚴は幼兒を感化する上に至大の效果のあるものです、

乙、慈愛　慈愛は思想なり感情なり目的なりに於てよく相一致し相調和して一体たらしめんとするに努むるものであります、此故に慈愛は同一事情の下に生活し、其思想の同一樣なる時に於て始めて生ずるものです、一家に於て母の慈愛は父の威嚴を以て服從せしむるに足らざる所を補ふことになりまして又感化上至大の効果あるものです。

丙、懲罰　以上の二は命令者に必らずなくてならぬ條件ですが次に命令を行はせる爲に懲罰の必要があります。懲罰の中で最も輕きは譴責です、其重きは体罰です、然れども重罰は之を課するに於て最も注意をせねばなりません、大抵は脅赫で足りますけれども夫でも尚は命令に從ひませぬ時は已むなく實罰（無慈悲の樣ではあれど）之に伴はねばならぬ、再度の脅嚇は更に其効なきものです懲罰を課するには聊かも憤怒激情に出でてはなりませぬ、懲罰を課せし後と雖も、尚は不足の狀を示すは其罰に於て最も有効ならしむるものであります。

右の三條中最も好ましからざるものは懲罰で又實際家庭にありては其必要は殆んどなく大低父の威嚴と母の慈愛とを以て十分行けようと思ひます。

以上は心の方面から幼兒の偏性を豫制するの方法を述べたのであります、今他の方面から考へて見ますに幼兒の偏癖は悉く心の方面から許り來るものでなく、生理的狀態から來る自然の結果も亦多々あるであらうと信じます、幼兒が短氣喧騷無頓着執拗怯懦激性等兩親を苦しめることが屢々ありますけれども、是等は多く食物の消化血液の循環若くば其他の生理的情態の如何により來る所の自然的結果でありませう、今卑近なる一例を擧げて言はゞ、幼兒が聲を揚げて泣き叫んだと謂つて度々叱らるゝことがありましたが、後に至つて足の蹶に刺のありし事を發見して、初めて叫ぶの無理ならぬを悟つたといふことがあります、是等は珍らしからぬ例であります、それ故生理的方面から來る偏性を豫制せようと思はゞ須らく身体組織を十分に育成して然る後心性を改善せねばならぬと思ひます、今左に生理的方面から之が豫制の方法を述べませう。

（一）　睡眠を催す塲合　　睡眠を催す塲合に當り幼兒は通例無理をいつて父母を困らせることが往々あります、之れは果して如何なる原因によるのでしやう。尤も種々なこともありませうが、つまり睡くなつても幼兒の生理狀態に於て睡眠を許さない所があるからでありませうと思ひます。其樣な塲合にはよく夫れ等を調べた上で、不滿足の點を補つてやらねばなりません。

（二）　入浴嗽盥等の塲合　　入浴嗽盥等の塲合に

當りて、兒童は大低夫を厭ふものです、甚だしきは泣き叫んで困ります。が是は最初兒童を入浴させる時分に父母たるものが、幼兒と大人と同一視して其寒温の適否を誤り、幼兒の温覺に不適當なる刺戟を與へたることがありますから、幼兒は之を嫌ふやうになつたのでありませう、それですから幼兒を相手になすことは何にも彼も幼兒相當の仕向をなすべき筈にて、この温覺の如きも大に注意を要すべきものです。

（三）飲食物慾望の場合　幼兒が飲食物を生理上より要求し來るも之を察せずして威赫叱責して之れが慾望を充たしめずして、之れが爲め癖癖を惹起せしむることもあるです、斯る場合にあつてはよく其の時間と欲するものとに注意して之れが食慾をも充たすべき筈です、左りながら若し不消化物を要求するとか贅澤物を望むが如き場合は特に意を用ふべきところです

右は僅かに二三の例を擧げて生理的方面からの方法をのべたばかりであります、兒童の初年に於てはいつも心的活動と全時に働くものであるから肉体の願望が即ち心意の願望となり、其願望は即ち偏性に變ずるものが多いです、それ故に之が養育の任に當るものは一層の同情と明智とを以て其癖癖が生理上如何なる所より原因し來るかを究め幼兒の偏性を豫制するといふは最も大切のことと思ひましたまゝ聊か心づきのことがらのみ書き立てたのに止まる、尚ほいろ〳〵心當りのことも澤山ありますけれど、又それは後のことに致しませう

幼兒の想像に付て

松本孝次郎

今爰に甲の犬に付て及乙の犬に付ての觀念を有て居る時に此二から材料を得て全く新に丙といふ犬の觀念を自分で作り出したならば此丙は想像に由てできた犬である。こういふ風に想像といふのは何かを工夫して作るといふはたらきをするのであつてぜひとも材料がなければならぬ。俗に言ふ物知りといふのは此材料を多く有て居るのである。そうして工夫家發明者といふのは材料を有つに止まらず之をいろ〳〵に工夫して別の物を作る力を有て居るのである。「エヂプト」時代の彫刻物に獅子の身体に羽のはえたものがあるが之は「エヂプト」人の想像より出でたるをあらはして居る。又神の使として羽の生えた子供をよく畫くが之は子供と羽とを結合して作りたる想像の結果である又馬琴の小説の中に大人國小人國などがあるが之は通例の人を大きく又は小さく想像したのである教育上幼兒の想像といふことに付て考へるときは吾人の注意すべきことが澤山ある。

第一　幼兒によつて實際の作業よりは深く思に沈で想像をめぐらす方にばかり心を向くるものがある。こういふ兒はまじめな課業をきらふものである。こういふ兒に對しては想像に走り過ぎぬやうにといふことを注意せねばならぬ。

第二　想像力の強い幼兒がわつたならば想像を

する爲に物を不精密に見はしないかといふ事に注意せねばならぬ。

第三　想像に富む幼兒は實際行にあらはすよりは口にて言ひあらはし又は字で書きあらはす方がうまくなるものである。即ち實行よりも想像の方が勝ち過るものであるから此點に注意せねばならぬ。

第四　想像に富む人は物事を記憶するに當てそれを圖にし又は表にしておぼえかやうにせねばおぼえられぬといふことがある。

第五　幼兒の想像を試すにはいろ〳〵の方法がある。たとへば一の花を見せておいて次に手本も何もなしに其花を畫かせる。そうすると想像の巧な兒はよくできる。又「コップ」が机の上に載つて居るといふことを口で言てそれを畫にあらはせと言ふもよい。而てやはり想像の巧な子はよくできる。又ある材料を與へてすきな物を作れと命ずるのもよろしい。又目的物を與へて材料にはかまはずにおくのもよろしい。たとへば積木を與へて何個つかつてもよいから家を作れといふとか、兎の話をどんなでもよいからして見よとかいふやうなのである。又目的と材料兩方とも定めてやつてもよろしい。以上の事は皆幼兒の想像力をあらはすものですから其心して見るべきである。

第六　幼兒によりて自分の觀念を作るに當りて作りかたが大層ちがふ。目で見たものを多くつかつて想像するものもあり又耳できいたものを多くつかふ、筋肉に觸れたものを多くつかふなど樣々のちがひがある。之は觀念のでき方がちがふから想像の材料もちがふのである。即ち觀念の作り方

や想像の流義がちがふので大人にもあることである。幼兒の想像の材料が偏して居ると分つたならば之を廣くするやうに導いてやらねばならぬ。

第七　人の道德心は想像がよく發達する事を要する。凡て人は他人の不幸には同情起り易く幸福には同情の起り方が鈍い。そして幼兒にも亦かゝる傾がある。だから他人の幸福に對しても快樂に對してもよく同情を起すやうに想像力を養ふ事は必要である。嫉妬心などを防ぐ爲に他人の幸を喜ぶやうに導かねばならぬ。

こゝに殘酷な兒があつて動物をひどくするものありとするに、多くは之を道德心足らず、知識足らずと心配するに及ばぬ。之は想像力が足らぬのである。だからいろ〳〵の工夫畫工夫話などをさせるとよろしい。そうするとなはるものである。想像作用に付ては今から五十年前頃までは教育上そう重くないものとし記臆を重いとして居つた。それが五十年來想像を重んずるやうになつた。昔は想像を養へば空想を抱くやうになるとして賤んで居つたけれども今は教育家の考がちがつて來てできるだけ想像力を養ふがよいとなつて來た。已に道德上工夫上想像を養ふ必要ありとしたならば其方法を考へる必要がある。

第八　これには幼時には遊嬉がよろしい。謎のやうな事を考へて解かせるとか、又は材料をもつて何か作るとか凡てあそびに由て養ふがよろしい今一は幼兒に向てする談話である。之はまだ見聞せぬ事物を其話に由て幼兒に想像させるのであるからそれだけ想像を練る事になる。

第九　摸倣と想像とは相距るごとくで實は近い

ものである。兩方相待つものである。まねをするものは發明想像が下手であるといふ人が多いけれどもそうではない。まねのうまい者は想像が強い之はまねをして想像の材料を多くとりこんでおくので想像には摸倣といふ事が要件である。

第十　想像の足らぬのも害があるが強きに過ぐるのも害がある。凡て極端は人心に害のあるものである。想像の強過ぎる者は僞になることがある。之は心の中で想像して作つた新觀念があまり多く爲に眞の觀念と新觀念との區別がつかなくなつたのである。實物に當りて得た觀念であるか新に作つたのであるか迷ふのである。そこで新觀念をも實際あつたやうに思つて發表する。之が即ち僞となるものである。故に此類のうそは憎むべき性質のものではない。けれどもうそにちがひないのであるからよく注意してなるべく實物によりて得た事をよくおぼにさせ又一方では實物によらぬ話のごとき事をおぼえさせて其區別をよく知らしめつまり實物より得たものと心の中で新に得たものとの區別をよく知らしむるがよろしい。そうするとうそが少くなる。そうして一方では訓育に由りて誤りて僞れば不利益であることを知らしむるとよろしい。この想像に由りて僞る兒の處置法は現今困難な教育事業中の一である。

第十一　想像作用を滿足さす法はどうであるかといふと幼兒が想像したいと望む時に想像をすることのできるやうにしてやると滿足する。それには幼兒の考へる談話、遊嬉、繪畫などは何れも幼兒の想像に滿足を與へるものである。

史傳

大題小題二

米溪

サーモピレーの戰

軍さ物語りは、婦人の耳に疎きも、男の子の最も喜ぶ所、賤が獄の七本槍は、お祖母さんの御伽語に馴れたるべく、楠正成の話は、繪草紙の說明に聞き飽きもしたらん、さればとて之は耳新らしき材料とにはあらざるも、稍目先きの變れると、其の事の壯烈とは、聊か又御伽話の一助にもならんか、夫にても男の子にとのみのものにもあらざるべしと思ひて筆採りぬ。

歲月悠々三千載、桑滄の變、今は昔しの樣なきも、試みに、古代希臘の地圖を取て一瞥せよ、エイジャン海上、希臘の東海に瀕して、ユーボアなる一島を見ん、島と陸とによりて狹める地峽は、乃ちマラソンにして、峽頭の一灣は所謂マリスなり、ユータの嶮山突として、餘勢海に逼り、森林鬱として、雲を藏し、霧を含み、山骨露出する處岩角兀として、崔嵬、仰ぐべく、攀つべからず、稱すべく、踏むべからず、斷崖忽如として脈を歛むる下、僅かに一條の道、車を遣るべく、之れより海に至るもの、約一英里、沼澤遙に連なりて、泥濘氣蒸す。天晴明に當りては、潮頭の白沫紺碧の上に浮び、斷崖天を摩する下、春暉西澤を互り雲霧跡を歛めて、四邊の噴泉、温かにして、痾を

養ふべきも、林樹雲を吐て、白霧沼を蔽ひ、風山岳を動かして、萬籟怒號するに當りては、濤は戰皷を皷して、山伯舞を奏し、天地晦冥、風物濛々之れ往昔のサーモピレーなり。

往古セッサリア人、フヲシャ人と此の地を狹み住して、互に爭鬪するや。彼の徑路に當りて、墻壁を築き、以て其の侵入を防ぎしが、フヲシャ人山を遶りて海に注ぐ、急流の川床に從ひ、絶險の間に彼の沼澤に徑せず、直ちに敵地に通ずべき、一條の山路あることを發見してより、墻壁遂に効を奏せず、頽敗理せざるに至りしが、之れ北方希臘より、南に入る關門にして、誠に天與の形勝、一夫の力、以て千軍を支ふべきの地なり。而してスパルタ王レヲニダス、三百の雄兵を提げて、波斯の大軍を迎へたるも、實に此の地なり。

蓋し此の戰は、獨り人事上に根するのみならず又宗教上よりも來れり、乃ち波斯人は拜火教徒にして、獨り大陽及火を崇拜し、希臘人の、偶像を禮拜するを嫌忌せり。

是の時に當り、波期王領する所、東既に印度高加索より、イージャンに至り、西裏海より紅海の濱に及び、漸次、地中海東岸の小自由國を蠶食せり。希臘人彼を呼ひて、東洋の首領と云ふ。遂に希臘を征伐せんと欲し、使を四方に派して、其の水土を献し、以て附庸の意を表せしむ、遠近、風を望んで、歸するもの甚だ多し。而して志未だ酬ゆる所なく、ブライアス空しく、憾を飲で地下に入るや、ザーキジス、父の志を繼き、遂に其の欲する所をなさんと期し、大軍既に集る、二百五十万と稱す、進て歐羅巴に渡らんとし、ヘルレ

スポンドの海峽に長さ一哩なる二條の船梁を架し全軍渡り終る迄、實に七晝夜を費しぬ。而して、別に、一大艦隊は、北の方へルレスポンドに航し夫より西に轉じ、海濱を進みて、陸軍と連絡を保ち、希臘の北部を蹂躪して、アッチカに向ひ、洪水の如き勢を以て進行せり、蕞爾たる小邦、克く之を支ふるを得べきか。

東洋專制の洪濤、澎湃として、天を浸し、山を覆ひ、泰西幼稚の文明、爲に其の光明を滅せんとす。危い哉。然と雖とも、ヘルラス全土、豈一の勇邦なからんや。アゼンス、スパルタの二國、憤然、起て之に抗し、聯合して防禦に當らんとす。是に於てか、附近の小邦、亦此の聯合に加盟するもの多し。

希臘各洲の委員、即ちコリンス地峽に會じて、防禦の策を議せり。時にザーキジス、營をサージスに構へ、軍威を耀かし、其の海軍は、イジャン海濱を周りて航し、陸軍はヘルレスポンドを横過し、希臘北方の諸洲を席捲して、南下の勢正に急飈の如くならんとす。若し夫れ、危を轉じて其の難を支ふるは、唯一策あり、天然の形勢を占め、隘路を塞ぎて、大軍一時に通過すべからざるに乘じ、數人の接戰を以て成敗を決するが如き地點を防禦するに在り。是の時に當りては、勝敗の決、勢にあらず、心に在り、數に在らず、志に在り。以て守るべく、以て戰ふべし。

之等の峽路の第一のものは、右をテムプと云ふ一隊は其を固守せんが爲めに送られしと雖とも、之を守る、功少くして、困難多しとなし、遂に之を捨てぬ。第二の要路は即ちサーモピレーなり。

而して、地峽に於て、議を凝せる評議員等は、未だ別に、山徑わつて存するを知らず。獨り此の海濱の徑路を固守すれば、敵の總軍、到底、南方希臘人の臥榻に、其の鼾聲だも窺ふ能はざるものと信せるなり。

是に於てか、其の戰艦は、ユーボアに沿ふて、防禦線を張り、以て海峽に達し、及び、徑路を辿りて上陸する波斯人を防ぎ、其の一隊は、ホットゲーツ、乃ち（温泉あるより得たる暑き門の稱ある）サーモピレーを防守せしめぬ。兵僅かに四千皆、各都府より派遣せる所にして、其の總督は、近來新に、スパルター王の一となりし、レヲニダスなり。

スパルタ人、由來勇武を以て稱せられ、壯丁は幼より、軍事的教鍊の下に、身心を鍛ふことなれば、其の剛勇四境に冠として、士は皆恥を重んじ死を輕んじ、兒童走卒、亦自から武士的態度を具ふ。而して、レヲンダスの選ばれて、此の征伐の途に上るや、自から必死を期せり。謂へらく、一身死して、スパルタ以て其の國難を免かるゝを得んと。蓋し、此の役、戰をデルファイの殿堂にトして、ハーキュルス種の王の一人死を決して、スパルタの難免かれん、との纖言を得、之を信ずればなり。

是に於て、レヲニダス、令を下して、決死の士を撰ぶ、敢て剛氣勇猛のものゝみにあらず。曰く繼嗣なきものは去れと、得る所、部率三百、縱令一人の生還するものなきも、スパルタ人の血は、以て長へに、其の宗廟を際らんなり。

精兵三百、各自僕隷數人を携へて伍をなすを以

て、其の數自から增加するも、軍容肅として、又侵すべからず。發するに臨みて、各、禮を具へて親ら葬らるゝの式をなす。謂へらく、不幸虜となりて、敵の軍門に、虐殺せられんか、魂魄宙宇に彷徨ふて、歸するに所なけんとず。士苟も、禮を以て葬られずんば、孰れか又、天の樂園に、神の光明を仰ぐを得んと。

悽惋の氣、國內に充ち滿ちて、慘憺たる光景、天日暗からんとするも、以てレヲニダスの魄を侵すに足らず。以て其の部兵の氣を奪ふに足らず。嗚呼又烈ならずや。

況んや、彼のレヲニダスの妻の如きに於てをや國滅びんとして、四境悲風滿つ、起つて、此の難を濟するものなくんば、蒼生を如何んせん。是の時に當りて、此の夫あるを知る、何爲ぞ、紅閨夢裡の涙にむせびて、其の前途を沮止するが如く怯ならんや。請ふ、其の未だ年若く、少女の群に在りし時の事を聞け。

波斯王、書を送りて、彼の父に降伏を勸め、說くに威福を以てするや、父の意、甚だ決するに憚かる、而して、實は禍心を包藏して、之を誘致せんとせしなり。是の時に當りて、決然、辭を挾みて、其の父を危難の地より救ひしは、此の少女なり。

當時、スパルタの婦人等、其の良人の戰に臨むや、訣別に際し、相告げて曰く、請ふ、楯を手にして歸るを得ずんば、之に乘じて歸れと。

嗚呼、之れ涙なきか、眞に涙なき乎、否、唯だ離別の間に漓かさるのみ。スパルタの精神教育は遂に、婦人をして、其の遠征の良人に嘘するに此

の言葉を以てせしめ、男子をして、其の戰に臨むに、彼の決心を以てせしむ。

記せよ、楯を皷して、凱歌を奏する能はずんば楯に乘る死尸となりて還れとは、其の最愛の、妻の唇より漏るゝ詞なることを。

恥あるもの、誰れか奮はざらんや。其の情や、誠に、悲愴を極むと雖ども、其の事や、實に、烈日秋霜の如く、千古に亙りて、人の肺肝に徹するものあるを覺ふ。

嗚呼、豈涙なからんや。凛乎たる精神は、遂に之を漓ぐを容さゞるなり。（未完）

織田信行の侍女勝子

布士酒舍

勝子の質性

勝子！はてな、私のお友達にも同じ名の人があるが……。織田信行の侍女！　織田信行といふ人は、皆さんも御存じの信長といふ豪將の弟で、尾張の岩倉城といふお城に居つた人にちがいない、信行や信長には當時侍女も多數居つたでせうに、その中でひとり三百五十余年を經て今の世に殘つて、皆さんのお手本とされて居るのは、何か面白い事跡があつたのであらうと、種々調べて見ると、成る程あるは〳〵、それは悲しい事や心持ちのいー事があります。親父さんや阿母さんの名は傳はらず、自分の姓もわからない程の貧しい農家に生れ、朝夕田畑の泥に穢れた中にそだつた女子でありながら、その心の綺麗な事つたら、お化粧でごまかすありはせのお嬢さんとは比べ物にならない。

又その力のあつた事をいへば、梅が谷や大砲ど

ころではない、かの家康などいふ何貫目あるかわからい樣なふとったおぢさんをかつぎだし、何万人といふ人を一時に騷がせよーとまでし、しまひには國を背負つて立つた位、それは〳〵偉い人である事が解りましたから、是非皆さんにもお話ししたいと思ひまして……。

信行の臣津田彌八

さて當時多勢ありました信行の御家來中に、津田彌八といふ人がありました、もと御城下近くの在郷生れの者ですが、家計も豊かでないので御城に御奉公する事になりました。しかしもと〳〵學問もないお百姓ですから始めは勝手廻りの仕事をして、恰度太閤樣のお若い時のよーに、薪を割ったり水を汲んだりして居ましたが、百姓とはいひながら賢くてその上心だてがよく、よく主人の命を守り從順に正直に働くので、だん〳〵とりたてられて遂に身分を戴き、とう〳〵御傍の御用人とまでなり、何でも彌八彼でも彌八、彌八〳〵とまではどうか知りませんが殿樣の御使ひや何かには是非彌八でなくてはといふ程に、御信任が渥くなりました。

信長の臣佐久間七郎左工門

さてお話しはかはつて、その當時信長の方には大切な普代の御家來に、佐久間七郎左工門といふ奸獰邪智な人がありました。この人は勝家に仕へて夜叉女蕃といはれ、儘勇の聞こえあつた佐久間盛政の弟で、家柄といひ身分といひ勢力といひ、先祖のお陰で威張つて居つて、同情などいふ事にとぼしい、いはゞ我が儘一天張で成長した人でしたから、かの津田彌八が信行の御使ひで信長のところへ來たりまた七郎左工門か信行のところへ行つたりすると

きに、同じく肩を比べるのを殘念に思つて、あんな身分も何にもない土百姓のなりわがりと席を同じくし、直接に言葉を交はすのは汚らはしいなどゝ、身分やなんぞを持ち出して、彌八の出世を大層猜んで居ました。

勝子の許嫁　彌八は學問といつては別にないのですが、第一心立てが正しい上にうまれつき賢いので、日に益し信行の愛はふかくなり、信行が年來わつく信用して使つて居つた忠實な侍女と、二三年の内に結婚するよーにといふ事を双方に言ひ含め、内々その事に定まつたのでした。

人は假令わるい事をしても、自分だけは誠をつくして行かなければならない。誠は最後の勝利であるといふ事は、彌八の精神ですから、心に僞虚とか猜疑とかいふものは毛頭ないので、自然人を見てもさういふ事を推察する餘裕がないのです。

然るに猜み深い七郎左工門は、信行の寵愛が日に〳〵まして、出世する彌八を仇に思ひ「なーに百姓風情が……」と、女々しくも嫉妬の炎に我れと身を苦しめ、奸計をめぐらしたのです、茲において或時忠實なる彌八の身は、突然起つて猛惡な一陣の風のために、草葉の露と諸共に、はかなくも吹きちらされてしまつたのです。

勝子の確志　信行の驚き悲しみはさてをき、勝子の愁傷はいかばかりでしたらう。かりにも主の恩命で一生の苦樂をちぎつた勝子の悲歎はいかばかりでしたらう。然し元來氣象優れた勝子は、一片の感情を面にあらはさず、飽くまで固い意志の下に、恐るべき覺悟を決めたのです。信行はいくら騷いで敵にその罪を詰つても、一度地下に冥

したはかなき露の身は、再びもとの葉末にかへらないのです。

今や股肱の臣を失つて、片手を殺がれた樣に力をおとして居る信行は、また一方に、ひたすら意を明かして暇を歎願する侍女勝子の心情をも汲まねばならないのです。しかし信行がいかに同情の念に富んで居たとしても、その決心をきいては將來を危み、女子の纖弱を憂ひ、再三慰撫してこれを制してはみたものゝ、勝子の意志は日を追うてます〳〵固いので、つひにその覺悟を許し暇を出したのです。覺悟とは何でせう？覺悟とは……

昔の復讎今の自立　復讎！　復讎は野蠻未開の國の風ですから、文明國では惡德の最も大なるものとして忌み嫌ふのです。我が國でも道德上は無論、法律上でさへ今日は禁じてあります。然るにこの時代には道德上立派な事と、自然の風がなつてをつたのです。今は政事がゆき屆いて、かういふ惡人は直ちに刑に處せられますが、この頃は社會の秩序も法律の制裁も今とは大層違つて、國民は日夜安き心も無く、强いものは弱いものを苦しめ、惡人は跋扈し、些細な事にも血の雨をふらすといふ世ですから、自然この復讎などいふ事が、却つて世の秩序を維持するといふ風があつたのです。

それでこの時代には、最も立派な德と世の中が認めて居た事は、今の世からいふ場合に、貞を守り自活しうるだけの學問或は技藝を脩めて自立し亡靈の冥福を祈り事をなして、誠意を世にあらはすと同じ價値のある行爲なのです。それ故社會的一時の行動はすてゝ、靑史に輝く所以の精神を汲

まねばならぬのです。

勝子の窺機　七郎左工門は信行の無二の寵臣を殺したのですから、そのまゝにして居られないそこで直ぐ樣尾張の國を逃げて美濃の國にゆき、稻葉城を守護して居つた齋藤利政（出家して道三といふ）といふ人のもとに隱れて居ましたが、信長も弟の信行からは責められ、又七郎左工門の不都合を怒つて、齋藤利政に早速返へす樣にと言ひやりましたが、何度賴んでも利政は聞き入れないのみか、良い臣を得たといふ樣な考へで保護して居たのです。恰度その時稻葉城下の在鄕に、勝子の叔父さんが居つたために、勝子は信行に暇をとつてこの叔父さんの許に潛み、ひたすら時機を窺つて居たのです。

すると或時利政の孫の龍興といふ人が、二三人の供をつれて郊外に鷹狩に出た途次、傍らの農家に休みましたに、容姿鄙しからず品位自から備はれる一小女の居るを見て、かゝる山里におく事を惜しみ、利政の夫人の侍女としました。少女は夫人のためにもよく忠節をつくしたので、大層寵愛されて、今はその小女の言ふ事は何んでも用ゐられる樣になりました。

稻葉城中の騎射　時は三月、稻葉城中今や花の雪を以つてうづめられ、昨冬のさびしさおもかけいづこへか消えはてて、ひろさ〳〵馬場は青疊しきつめたらん樣なる中に、いろ〳〵の花もて飾られたる的がところ〴〵にたてられ、此方には定紋うつた幕をうちまわし、殿中には階近く利政及び夫人を中央にして近臣これを擁し、一門一族皆集りて滿堂整然威儀を裝ひ、今日を晴れと着飾

りたる城下の士女在々の老幼は堺の外に滿ち〳〵て、謂はゞ今の春季運動會ともいふべき、當時の武術の春季演習會の騎射を見物して居ました、夫人の傍には、姿儀端然としてどことなく品位あり威ある年若き女子一人、豫て倍觀の懇願夫人にきゝ入れられてその傍に坐し、階前に名乘りを擧げて的に向かふ騎手の一人に、ひたすら瞳をこらして居ました。

勝子の滿願　この日射手は總員十五名でしたが、五番六番七番とすぎ、はや十番となり十三十四となつて、いよ〳〵最後に佐久間七郎左工門名乘るやおそし、津田彌八の妻云々といふ答へは、思はずも夫人の傍なる少女より聞こえて、はやくも宿志は貫かれました。

電光石火のその擧動に膽を奪はれた諸勇士は、呆然として居つた隙に、少女は平然階下に坐を正して、利政夫妻に向かひ、逐一事情を述へ、主恩を謝し大罪を詫びて自害しよーとしました。

勝子の再生　利政深く少女の貞烈に感じ、一且はその罪を許さうとしましたが、かへりみ思へば、前に信長よりの請求もあり、かつは一婦人のために良士を失つたのを耻ぢ、遂に臣下に命じて所罰する事になりました。傍なる夫人は强ひて乞ひ求めて、その夜一夜自分がこれを預かりましたさうして夫人は今夜の中に是非城中から遁がれさせよーとしましたが、少女は既に本望を果たして今は世に望みなく、かつは夫人の身に罪の來たちん事を恐れて、從ふ色が見えなかつたのです、然し夫人の厚き〳〵同情の涙は、つひに城中を逃れさせました。

小女は緣をたどつて三河に居る德川家康の臣、大須賀康高の許に一時かりの身をよせましたが、康高もその貞烈膽勇に感じ、家康にその事を話しますと、家康は人物を捨てない人ですから、痛く感賞して直ちに自分の城中に入れ、嚴重な保護の下に渥く遇し、他出の折などは必ず二三人の勇士をして警護させて居ました。

勝子の勢力　佐久間盛政は、弟七郎左工門が身分も何もない下賤の一婦人に殺害されたのを遺憾に思ひ、嚴しく探偵の折から、勝子の家康のもとにある事を知り、二人の刺客を遣つて機を窺はせましたが、刺客は却つて捕はれて遠江の見附の驛にさらされました。

この事を聞いて盛政は目を丸くして大變に怒り信長に乞ひ池田信輝を使とし、少女を渡さん事を家康に申し込みました。然るに家康は頭を横にふつて、「彼れは類ひのない烈女である。ことに自分を手賴つて來たものを渡す事はできない」と云つて、頑として言ふ事を聞きません。そこで家康と信長とは折合はなくなつて、尾張三河の二國は、日に〳〵暗憺たる戰雲に覆はれきて、血の雨は今や降らんといふ愴慘く凄じい景色になりましたから、小女は默つて居ません。かくて碌々余命を存するも、一に家康の大恩であるに、まして今自分一人のために天下の安き眠りを覺し、多くの兵士を殺し良民を苦しましめるは本意でないといつて鴻大なる主恩を謝し乞うて自から刀をとり、嗚まれる戰雲の内にかくれてしまつたので、尾三の天下は無事に歸し、勝子の名は千載に殘つて居るのです。

結評　かへりみれば彌八の死は、許嫁の女子の生涯に一大頓挫を與へ、遂に樂しい日月を見る事をさせず。一生をして逆境に沈ましめました。

群雄割據武斷政治の當時の社會は、纖弱なる一婦人をして淺間しくも復讎の悲劇を演ぜん事を命じました。

天下を動かすところの大勢力をもてる誠實は、實に農家の一少女の心底にとらへられ、貞烈となつて靑史にあらはれ、その名のもとに万世に輝いて居ます。

嗚呼一少女！　嗚呼一婦人！　もとこれ尾張在鄕の一農民の女！　信行の侍女勝子よあはれ。

文苑

夕早苗

夕日影さすや門田に賤の男が
　くれぬそのまとさなへとるなり
　　諏訪忠元

夕日影かたふく頃は賤の女が
　さなへとる手もいそしけにみゆ
　　增山三雪子

星をみて出にし賤は星を見て
　歸るまてとるさ苗草かな
　　相澤求

千町田の苗代水に夕月の
　影みゆるまてさ苗とるなり
　　又原保行

首夏二首

布士廼舍

咲くと見し花はあとなく春暮れて
繁る青葉は夢かとぞ思ふ

花散りぬ青葉繁りぬ今更に
世の常なさの風ぞ身にしむ

常夏

同人

常夏とさくからにこそ物樂けれ
花の色香は飽かすやはある

夢に子規を聞く

同人

一聲はたゞうたゝねの夢にして
はしゐなからに月かたふきぬ

藤衣

鷺水

なき母君の植にたまひし
花を見てよめる

兄

おほしてし花見るたびにいとゝしく
なき母君のしたはしきかな

おなし君の植え玉ひし藤
の花を見てよめる

妹

おほしつる君しまさねは中々に
あはれをそふる藤波の花

母君のうせ玉ひけるおり
古里をたち都へのぼると
てよめる

兄

いくたびかためしはあれと故里を
わけて今霄のさりかたきかな

兄君の今年大學を卒業す
るといふに母君のうせ玉
ひければよめる

妹

うくひすの初音もまたでいたつらに
　ちりて甲斐なき宿の梅か香

旅

布士廼舍

隙行く駒にうち乘りて
　こゝろの燈火辿りつゝ
繁り合ひたる文の道
　思へば隙なき旅路かな

葉ざくら

つねを

いとしや姉の君に、別れしこと、
思ひいでゝは、折々哀しめる人に

めぐし子おきて　母おきて
　はらから棄てゝ　人知らぬ
遠き黄泉に　旅ねして
　かへらぬ人の　いとほしや
庭の葉ざくら　ひと枝を

きみが手向けの　まごころは
こけむすかげの　其の人の
いかにあはれと　おぼすらむ

說林

幼稚園保姆と母の責任

タツヒング夫人

今日私は皆さんの前で、保姆としての經驗を述ぶると同時に母としての私の經驗をたゞ經驗の儘お話をしやうと思ひます。

此頃築地と四谷の兩方の幼稚園が合併して會を開いて居りますが、それに母の遊技と云ふがございまして、其中に小い庭造りと云ふ遊技がございますが、その遊技を勉強して居りました、即ち植物を培養するは子供を保育することに就て何の樣に大事であるかと云ふ事を勉強して居りました、

私共がさういふ風に花を培養することを勉強しまして此事が果して子供の性質品性に何の樣に大切であるかと云ふことを研究致しました、が、之に因りて子供の學ぶことは何かと申しますと、天地間に行はるゝ天然自然の法則といふものを學ぶことでございます子供は花を栽培することに由りて天然の法則を知る、即ちそれは子供が小い種を一旦地に下す時は彼の恩物の樣に遊びたい時は出し、遊びたくない時は戸棚に仕舞ふ樣なことはなりませんで、何時でも必要に應じて水を與へ土を培ふてやらねばならぬ色々世話がある、そして其世話はつまり天然の法則に從つてしなければなりませぬ、子供の弄ぶ恩物ならば自分の勝手で捨

て丶置く事は出來るが花ならば何時水を遣つて宜いか、何時土に下すかと云ふことに始終注意せねばならぬ、又餘計に水を遣つたり、遊びたい時に遊へば必らず枯れる。故に此植物の栽培によりて子供は天然の法則に從ふことを知ると同時に、よく己れを制することに慣れ、又物を愛するに從うて自分を忘れ、さうして柔順の性質を養ふといふことになります。

それから次に注意すべき點は其の植物の種を植ゑると夫から新しい芽が出る爲め、種が一旦死んで仕舞ふ、死んで仕舞ふてから更に新しい命が出る即ち之に由りて生命の復活といふ大切な稽古を子供が習ふ、物が美はしく成長するには一旦種が死んで仕舞はねば新しい芽が生ぜぬといふその復活の理を覺ることであります。

次に御話したいことは私共今フレーベルの誕生の時に當つて此頃フレーベルの生涯の事に就て子供に話しました保姆としてのフレーベル、幼稚園の卒先者としてのフレーベルは餘程豪い所の人で、大變智慧もあり、力もあり、思考力に富み、想像力に富み、教育家として世の中に立ち、或る時は軍隊にも出て、軍人としてもいゝ地位を得るといふ程の人であつたのである、然るに此の如ぎ地位は捨てゝ顧みず世の中に見えぬ所、小い所、詰らぬ所の小い子供を見て其の子供の保育法を始めた人である、名譽ある位置を得るよりも寧ろ小い子供を育てるが必要と云ふことを知つて名譽も位置も擲ち、何方も褒めて呉れぬ働きを始めたのである、此時に獨逸の政府は大變黨派があつて、フレーベルの育てた子供は大變活潑であり勇壯であつ

たものであるから、フレーベルは或危險な黨派に這入つて居るのでないか、小い子供に斯の如き危險の主義を吹き込まれては大變であるといふので獨逸の樣な美はしき政府でありましたが、折角立てたフレーベルの幼稚園が禁止せられることになりました。夫で自分の死ぬ時は自分の立てた幼稚園が、此後果して榮えるかドウなるかも知らぬで暗黑の世の中を送つたのでこざります。折角種を蒔いたけれどもドウなつたか判らぬで死んだ、所か今は幼稚園は萬國に行き渉つて何處にも擴まつて居る、幼稚園のみならず小學校でも高等學校でも大學でもフレーベルの立てた法に從つて何處にも益々此の主義は行はれる樣になつたのであります。

フレーベルは自分の生涯を全く主義の爲めに犧牲にしたことに依つて今日では萬國に必要を認められ教育の方向までも變へる樣になつた、丁度今より凡そ二千年前に彼の基督が自然の働き、愛の働き、信仰の働きをなしたにも係らず、當時の人は之を十字架に掛けて殺しました、非常の苦みを掛けたのであるが、基督は自分の苦みを喜んで死にました、併しなから三日目に蘇生して遂に基督教は萬國に傳へられて、其人の主義に依つて自由か社會に得らるゝ樣になつたのも其風が、まことに似た所があります。

それからモウ一人さういふ風に能く似寄つた人がある、それはモッと美はしい生活、命を他の人に與へん爲めに喜んで自分が犧牲となり、さうしてモッと美はしい命を與へる人がある、それは本當に子供を持つた母にあるのです。

其の母は自分の身といふものを全く殺し、自分といふものを考へぬよりさういふ美はしい働きが出來るのであります。母親となつた者は自分の命を自分の子供の爲めに捧げるならば、それは哀れな事であらうか、母となれば全く捧げて死なねばならぬ、それは哀れな事であるか、哀れな榮えある働きであるかと云ふことは一の疑問であります。それから此頃亞米利加の雜誌にございました大變名高い雜誌に一の問ひが出ました、それは世の中に婦人として生れた方が宜いか、男子として生れたが宜いかと云ふ問ひでありました。若し此問が支那に於て、印度に於て、若くは日本に於て問はれたならば果して如何でありませう。確に婦人として生れたは運の宜いことだと答へられませうか夫とも不幸な事でありませうか。

此問題に答へるために、暫らくフレーベルの幼時の事を追懷して見ませう、御承知の通りフレーベルはお父さんは牧師でございまして何千人の世話をしてやらねばならぬ非常に多忙な人でございました、母は小い時に亡くなつて繼母が參つてゐつたけれども充分の注意が出來ぬでございました、此時分からフレーベルは勉强室に這入つて、お父さんが相談したり勉强したりするを聞いて居て、子供が大人の話に注意して居たのであります、或る時お父さんが忙がしくして居るは何であるかと氣が附きて、お父さんが一生懸命に働いて居ることを子供心に見ると夫は男女間の爭ひと云ふことであつた、そこでフレーベンはなぜ和合せぬか、統一せぬかと云ふことを考へて、一体男と女が合はぬものならばなぜ神が男性と女性とを作つたの

であらうかと云ふことを感じて、兄さんの許へ行つて其譯を聞きました、それには兄さんも困つて庭に連れて出て小い鳥や小い花を見せて說き明かして上げたのである、それは花の樣な小いもので雄蕊雌蕊があるから鳥や風に依つて花粉を送つて一の實を結ぶ事を話し、鳥や植物でも神樣は同じ物を作らずに、同じないものからして和合して統一するのであると云ふことを子供に判る樣に話しました。其時にフレーベルはなる程と感じて、夫から大に天然界を勉强する樣になりました。

それからさういふ事を學んだ時に、それならば男女互ひの間に爭ひのあると云ふことは、なぜであるかと云ふ原因を搜そうと云ふことを考へて、とう〳〵自分の勉强の結果、男女間の不統一の原因は、つまり女性が母としての生活、母としての天分の生活を家庭で全ふせぬから起ると云ふことを發見した。母は自分の爲すべき事を能く判つて居らぬ、如何なる位置か判らぬ、婦人としての位置を貴ばぬ所から起ると云ふことを發見しました。

それでフレーベルは種々の書物を書いた、「母の遊技」とか「人間の敎育」とか澤山書物を書きましたが其第一の目的は女性として母としての價値を知らしめ、責任を知らしめ、それを全ふするにはドウ云ふ方法にすれば宜いかと云ふことを能く了解せしむる爲めでありました。

そこて、次に婦人の働き婦人の義務に就ての男子の爲すべき義務、爲すべき事の能力に就て少し考へて見たいと思ひます。男子は何時でも物を創造する力を有つて居る、そうして世の中で最も名高い人は男、名高い文學者も男であり、名高い美術

家も婦人の手にあらずして男子の手にある、又政治家、英雄、豪傑、軍人社會に於ても常に豪い創造者は男であります。

それでさういふ豪い人には、何處でも、何時でも私の知る所の場合に於ては、必らず豪い賢婦、才力ある所の母があることを知ります。グラッドストーンでもリンコルンでも自から言ふ所によれば我の斯うなつたは自分の力でなくして皆御母さんの賜であると云つて居ります、勿論有名な本を書くのも非常に豪い事であり、美はしい美術を出すのも音樂者となるのも何れも美はしい事である或は勇者となることも世の中の榮えであります。婦人は其處に立つて一つ考へねばならぬ、男子が立派な本を書のも美術品を出すのも其他いろ〳〵卓出した事を創造するのも必らず其の裏面にはお母さんの感化力といふものがあつて、母の感化に依つて造り出すので、母は隱れた所に非常の感化力のあるといふことを覺えて貰ひたいのであります。

そこで、私は今一の問題を揭げて御話致しませう即ちドウすれば吾々は理想的のお母さんになることが出來るかと云ふことであります。

第一前にも申しました通り本當の理想の母となつて豪い人を世に出すには、とうしても、基督の生涯の樣に、如何な時でも自分の責任を完ふする爲めに、自分を捨てゝ、自分を犧牲にしてかゝらねばなりませぬ、他を發達させる爲に、他を豪い者にする爲めには誰も見ぬ所に盡くして自分が献身的に働かねばならぬ、本當に事を盡くすにはどうしてもさうせねばならぬ、さうして社會の澤山の

人を益することが出來るのである。

それならばさういふ圓滿なる完全なる母にはドウしたならはなれませうか、自分一人演說を聞き、學校に這入り、種々の勉强することに依つてさういふ豪い母になれませうか、自分が健全の精神を以てするならばそれが出來るかと申しますに迚もそれは出來ませぬ、其力を與ふる一人の人を賴むにあらざれば理想的母として責任を全ふすることは出來ませぬ。其事を御話するは私に取ては苦しい又困難なことでありますけれども、母として此に立ち此の事を眞心からお話したいと思ひますから今少し私の經驗から話しをする時を與へて貰ひたいのであります。

今亞米利加に私の二人の子供がございます、それは私位に大きくなつて居ります、一人の總領の

男の子は五年間見ませぬから、私は非常に其子を見たく思ひます。それを思ひ出す時はとても自分で制することが出來ぬ程非常に苦しく逢ひたく思ひます、所が其の自分の情を制し、何時でも力を與へ慰みを與へてくれるは基督であります。基督に依り賴みて、私は力を得るのであります。親子の間で、唯國を離れて分れて居ると云ふこと位、母として苦しい事はありませぬ。又神樣は私に四人の子供を與へて下されたのでありますが、私の家庭に於て一番美しく、一番潤潑であり、是れこそ望み多望であると思つた子供は私と一所に僅か居つただけで、天に取られました。私共の非常に望みを置いた其子供が冷い土の中に這入つた時は其時は自分も其子と共に死にたい樣な心持が致しました、

其時の苦みと云ふものは今日に於さまして、尙、それを追懷し、記憶し、思ひ出しましてドウしても取れませぬ、そういふ追懷は何時も私の心を痛めます、それで其の子供の事を追懷することは非常に苦い事で、中々其の苦みは取れませぬ、其時に唯一の慰めを得ました、勿論人が種々慰めて呉れましたけれども夫からは決して慰めが得られませんで、たゞ益〻苦みを增す丈けでしたが其時靜かに天の聲が聞えました、今までの家庭の美はしき子は今は天に依つてあるから決して嘆くに及ばぬ、だから今迄其子供に使はんが爲めの金は他の澤山の子に使ふて行く、貴方の學んだ事も金もはや其の子供に費す必要がないから他に母としての責任を知らぬ澤山の母があるから、其の子供を育てる金を以て澤山の子供を育てるが貴方の天職であるといふ事を知りました。

それで勿論、私が此の敎育事業をする時にはいろ〳〵苦もあり障害もあります。其の妨げやら困難の中に、苦みの中に幾度も望みを以て聞かせて下さるは遙か亞米利加に置かれた小い墓であります此小さな墓の事を思ひ、其の子供の事を思ひ出して、私は嗚呼何時でも斯ういふ勇氣のない事ではいかぬ、神樣が子供を取つた目的はモッと澤山の子供を益する爲めと云ふことを示されたのでないかといふ事に依つて何時も慰めを得て美はしき働きをして行けます。夫で何時でも幼稚園の爲めに總ての金も捧げ命も捧げ、日本に在れば日本の幼稚園の發達せんことを何時でも望んでやつて居ります。

それからさういふ大なる非常なる試みとか、困難

に惱むばかりでなく、母として居る中に、毎日々々自分で自分を制することの出來ぬ苦みがあります。又感情の押へにくい事もあります、さういふ小い事の時々刻々起る時に之に打勝つて行くのは誰の力であるかといへば、全く基督の力に依つて美はしき望みを有つて居るからであります。子供が死んで世の中に望みなく絶望して居た時に、又美はしき望みを與へ、賢い傾向の天職を與へる者は基督の他に果して誰がありませう。何方も出來ぬ慰め働きを與へて下さるは何時でも基督でありますから、基督は實に斷へず極く美はしき友であるのです。

今母の側からさういふ樣にお話を申しましたけれども、尙貴方がた此に居らるゝ幼稚園の先生方に對しても少しお話をしたいと思ひます。フレーベルは此の如き品位圓滿なる母にしやうと思ふてお母さんを高尙にして家庭を清くしやうと云ふ考へで、六ケしき哲學的の本やら、又容易い遊戯の本やらを書きました、夫を子供の教育に應用して貰はふと思ふてお母樣に願ふたが、其お母さまがたはフレーベルに倣ふて夫を活用しやう、應用しやうと云ふことは遂に出來なかつたのでして、反つて此に御集りの樣な若い所の未だ婚禮もせられず、學ばふと思へば學ばれ、立派な精神と身体とを有つて居らるゝ御婦人方がフレーベルを助けて、其人たちがフレーベルを勉强して、美はしき才知を以て得た主義や教育法を小い子供に用ふることが出來て、遂には家庭にまで其の精神を吹き込んで子供を助けると同時にお母さんも助けることが出來たのでありまず。故に貴方がたの樣に若い御婦

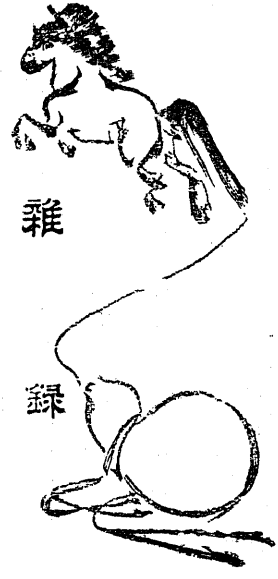
人がフレーベルの立てた時からズーッと幼稚園のためにやつて來て居るのであります。

先き程も申す通り極く若い所の、時も充分あり、それから學んだことを應用することも出來る御婦人が百年の間フレーベルの主義を繼いで來たのである、其心は各自御勉强も出來たのでせうが、母にはならぬが、澤山の子供を自分の子供と同じ樣に子供として教育することに依り保育することに依りてフレーベルの主義を實行したからであります。英吉利や亞米利加は非常にお母さんの責任を重んじてドウか完全な母にならしめやうと思ふて大會とか種々な事をして進歩主義になつて居る。それは誰に依つてさうなつて居るかと申しますと全く極く若い所の幼稚園の保姆方が、斯ういふ美はしき主義を知らせてやらねばならぬ、折角時があるから社會に知らさねばならぬと云ふので、夫と同時に萬國の母にも知らさねばならぬと云ふ所から、極く若い婦人が母の會などを始めて、それがだん〳〵進歩して來たのでありまして原因は全く若い所の保姆にあるのであります。

今此に坐つて居らるゝ御婦人方に申します、それは丁度歐米に於て此の如く婦人が働いた通りに、日本の社會を改良して美はしき社會を造り、責任やら義務を全ふさせやうとするならば、其の責任は貴方がた一人々々の頭に其の責任があるのですから、貴方がたは日本國のお母さんを改良することが出來るのであります。ドウか其の責任を深く感じて日本を動かすは貴方がた保姆にあると云ふことを能く御承知下さい。

終りにモウ一言申します。先き程は責任を能くお

話を申しました、其の重い所の責任を有つて居らるゝ皆さんはよく身を牽制し、肉体を牽制して能く其の主義を全ふせらるゝを望みます。そして其主義を完ふし、地位を完ふすることは果して如何にあるかと云ふことを御承知を望みたい、悲嘆の來り惱みの來る時、力を與ふるは天の神であることを御承知せられんことを願ひます。



雜錄

花のかたみ（承前）

や、て、

黄泉の使愈々せまりて參り身もなか〳〵に苦しく相成申候、最後の思出に心のまゝを申し殘さんものと覺悟致候へ共今は其の十が一だも述ぶるの勇氣無之候、さりとて此の儘に永く眠らんも殘念の極に候へば息のつゞかん限りを……

其三　元來何れの國とは申さず戰に捷利を得候國民は一般に奢侈贅澤に流れやすく其の結果は遂

に其の氣風さへ柔弱と相成り申候事は古來の歴史が重ね〳〵明らかに語る處に候、我國も清國との戰爭後此の弊に陷りしにあらずやと御見受け申すふし多々有之候、勿論社會の進むと共に皆樣の御生活の程度も御變はりあるべきは必定に候へ共さりとて今の御有樣は決して宜しきを得たるものとは思はれず候、且つや清國には見事勝利を得候へ共尚眼前に幾層か大なる强國の控へたる今日なれば勤儉質素の風習の御養成は尤も緊要の御事と存ぜられ候。

其四、故福澤先生のしきりに御說き遊ばされ候事なるが皆樣には所謂獨立の思想とやらが薄き樣に思はれ申候、一方には最早充分御成人遊ばされたる御子樣達にして尚御兩親に御依賴遊ばさるゝあれば、他方にはまだ左程御老体にもあらぬ御親達樣が早くも御隱居遊ばされて萬事を御子樣達に御まかせなさるゝ風に相見へ申候殊に婦人の御方に此の事多き樣に感じ申候、此の風は遠き西の國のそれと大に相違せる樣承り居候、勿論親子朋友知己などの御間柄に於て互に賴み助け合ひなさるゝ事の厚きは此上もなき我國の美風には候へ共他面には獨立心の乏しきを示せる事と思はれしは如何にや、弱肉强食とやら適者生存とやら申して生活競爭のはげしき今日にありては此等の點よく〳〵御考へ遊ばされん事切に御祈申上候。

其五　唐の古き詞に龍頭蛇尾とやら申す事之あり候がこは誠に我が國人の心の狀をよく云ひあらはしたる詞と存じ居候、由來皆樣には西國の人とはちがひ優りて敏捷怜悧と云ふ美はしき御氣質をもたせらるゝと共に勢ひ輕佻に流れ情に激しやす

く事にあたり忍耐持久の念に乏しき事も事實に候爲めに動もすればひたすらに流行を追ひ萬事繼續の風稀に候、我が國が御一新後僅々三四十年の間に今日の隆盛を致し候は主として此の敏捷の氣質に依る所に候へ共長所は即ち短所にて將來皆樣を益發達の氣運に參らしむるも此の氣質なるが之と同時に益衰弱の方に導くものも之に伴ふ輕俳の風に候、よく〳〵御注意なさるべき事に候、之を家庭の御教育に考へ候に御子樣達の玩具衣服を屢々取替へなさる事よろしからず候、御住居を時々御移りなさるも同樣に候、尙御子供の激し候時には成るべく冷淡に御取なしなさるゝ方よろしからんと思はれ申候

其六　猶も皆樣が世界列國競爭場の檜舞臺に御立ち遊ばされゝて後れを取らぬ樣になさらんとには此他幾多の御覺悟御緊要の御事と存候へ共、時迫まれる今はの際最早や精も續かず相成申候まゝ止むなく只題目のみを述べ申べく候。

共同的思想に乏しき事に候從つて反目敵視の有樣となり一致する事少なく候。

公共の利益を犧牲にして幾分の口腹を滿たさんとする人有之候。

萬事一定の秩席なく亂雜に處する傾有之候。

時間の價値を眞にさとられず候時即金に候ものを……

花のかたみは實に以上の如し、終りをも結ぶ餘命なくて去りぬ、虎は死して皮を殘し、花散つて此の遺言あり、人去つてそも何の殘とす所かある。

讀書餘錄

擊水

一、フロレンツの獅子

「ハインリッヒ、ベルンハルヂ」の「フロレンツ」の獅子と題する一小詩篇は、驚くべき母の慈愛の力を唱ひたるものなり。

伊太利のフロレンツ市といへるは、美麗繁華の都會として、其名古より高き所なるが、この都會に一個の動物園ありて、盛に珍禽奇獸を飼養して日々市民の縱覽に供せしが中に、最も市民の注意を惹きたるは一匹の大獅子なりけり。勇猛にして氣高き其姿、金眸霜牙、威風凛々、鐵檻の中に在りて尙絕えず東西に馳騁し南北に跳躍し、時に怒つて一度嘯く時は、さしも堅固の牢檻爲めに震動して聲あり、草木風なくして自ら委れ、百獸尾を捲き聲を潛め頭を垂れて悉く雌伏す、げに獸界の主たる趣には、觀る者驚歎して已む能はず、動物園の獸王は正に是れ、フロレンツ市好個の呼び物となりたりけり。

併も一日、驚くべき警報は電の如くに全市を通じて人心を驚殺したり。曰く『危險！危險！獅子は檻を破つて遁げたり、逃げよ避けよ誤つて獅子の餌食たる勿れ』。老若男女右往左往に走せ違ひ逃げ惑ひて、あはれ修羅の巷もかくやと思はれしが、それもたゞ一時の間にて、今や市民は皆家中に隱れて堅く門戸を鎖して復た出でずたゞ窓戸を通して街路を窺ひ見るのみ。さしも繁華比類なきフロレンツ市に復た一人の影もなく、滿都の光景忽ちに寂漠々として轉た悽愴を極めたり。

たゞ見る、可憐なる一人の幼兒の、目前に迫り來

る此大危難を知るに由なく、慈母の手を離れ來りて、獨り市場の井邊に座して餘念もなく戯れ遊べるあり。嗚呼何たる悲慘ぞ、何たる絶望の極ぞ、戸口の窓より觀望したる市民等は、既に死の手の幼兒に達せんとするを見て、空しく救を顧みこれかれ等く痛歎するのみ誰あつて、一身を捧げて此可憐兒を奪はんことを試みるものもなかりけり。何となれば、此時既に恐るべき咆哮漸く近つきてまのあたり慘害の悲痛を報じ來りたるを以てなり獅子は來れり、烈火の眼光鋭く幼兒を睨みながらあはや其前蹄を擧げて、一擊の下に粉齏せんとす。嗚呼無殘の光景嗚呼斷腸の光景、何とて之を救ふ者はあらざるか。

忽見る年尚少き一人の婦人、ふどろに髪を振り亂し彼方の家より跳り出でぬ。市民は等しく驚倒せり『アナ無殘！　オー婦人、何とて自ら慘害に身をば投ずる、今は是非なし、よしや行くとも愛兒を救ひ得ず、畢竟は共に共に死地に陷らんのみ、如かず逃れ歸りてせめて己が身をば全うせよ』併も母は奮然として彼の巨獸に立ち向ひぬ。やがて劒を並べたらんが如き彼の巨口より手早く幼兒を奪ひ取り、己が腕にしつかと抱きて急ぎ此場を逃れ去りぬ。獅子は茫然としてたゝずめり、喝采の聲は湧くが如くに起りたり。

嗚呼、母の恩愛の力には、さしもの猛獸も遂に其力を逞うし得ざりけり。

東京より　（五月廿八日）

久しく音信を怠り候、多罪、平に御海恕願ひ上げ候、兎角筆無精の性とて、自分の方に用のある時

許りつまらぬ事申し上げ、平生は頓と御無沙汰致すが、持つて生れた小生の持病に候　あしからず御了察下され度く候。

▲追々夏向に相成り候へども、兎角不順勝ちにて近年稀有の冷氣を感じ候。養蠶地などは、之が爲めに少からぬ霜害を相受け候由。次ぎに彼の恐るべき黑死病は、又々横濱に侵入し來り候由、申すまでもなく候へども此際皆樣には、各自御衛生の心掛け專一に存じ候。

▲一時、八釜しかりし改良服も、暫らく影を潛め候ひしが、夏向に相なりて、又ぼつ〳〵市中に散見致し候。併し一般の、改良服に對する思想は、餘程冷淡に相成り候樣考へられ候。もとより、只今の改良服は、何だか何處かに調和が取れ申さず大人には少々可笑味のあるは事實に候、先づ當分は是非なく學校向きの婦人は袴と致すより外致し方無之次第に候哉御高說承はり度く候。

▲夫に付きて、思ひ出し候。學校向きの婦人方の袴を着け候に付きては、衣服の袴に隱れる部分は全く餘計のものと存じ候に付き、袴着の衣服として下は袴上は半纏の形の樣なものにすれば、餘程經濟向きと存じられ候が、覺し召しは如何に候や。伺ひ上げ候。

▲井口女史歸朝せられて、女子體操學校にも教鞭を取られ居り候樣、承はり及び候。是に於て女子の体育眞に發達の隆運に向ひ可申と存じ候。從來は只だ云ふ者ありて行ふ者なかりし故、必要〳〵と申しながら、遲々として進まざりし事と存候、所謂衣服問題の如きも、之に依りて自然に解決せられ可申と存じ候。

▲御話は變り候へども、今回の內國大博覽會に付きて、最も成功せしは、全國大教育會の擧に有之候由。夫は教育會に緣故のある人は、教師といはず學生といはず、旅宿から、辨當から何から何まで一切引き受けて世話致し、殊に博覽會附近の大低の見物は皆半額にて見物致させし由、中々の盡力、一通りの事にて無之との事に候。

▲過日催され候、下田歌子女史の癸卯園遊會の純利益は七千有餘圓との事に候、さすがはと感心の外無之候。

▲近來清國人の學校參觀に參らるゝ者引き切らず候、如何に中華自慢の同國人も百聞一見の譬、今日頃はさすがに我國の實際を感知せられ候事と存じ候。清國人の學校參觀は實に彼國の文化發達上唯一の方便と存じ候。

▲夫に付きても、我國人は益々愼重に愼重を加へ悠に他國の範たるに足るべき覺悟が必要に候。公德問題の聲など、近頃は又々大分下火と相成り候樣なれども、こはどこまでも根本的に養成する樣御互に奮發致したき事に候。

▲女學校は續々繁殖致し申候。然し女學校を以て射利の用に供せんとの考は根本から贊成致し申さず候。同じく女學の雜誌や少年の雜誌を以て射利の具とする考も、頗る有害の事に候、此事に付きては、本誌に於ても論じたる所ありしが、何時ぞやの萬朝報には極めて痛快に論じ有之候。

▲都下の某新聞には、又々當世百人娘といふを掲載し始め候。或人は都會の樣な所では至極便利だと評し合ひ候。或人は、女子教育上、甚だ面白からぬ所業と批難致し候。餘り年少な娘だちを持ち

揚げ賞めそやすは、結局娘たちの虛榮心を增長させる事に相成ると申す事に候。

▲報知新聞には、女學生の白粉禁止問題中々盛況に候。弦齋の小說食道樂、これは家庭の讀ものとしても、女生徒諸君の讀みものとしても、至極結構と存じ候。

▲尙次回には、何か面白き事申しのぶべく候、何分目下多忙を極め居り候間、下らぬことのみ、取り急ぎ認め候。頓首。

幼稚園の遊嬉

在來の遊嬉の書物より取りたるもあり、又は新に作りたるもあり、先般女子高師、附屬幼稚園で保育要項を定めると同時に、實施すべき遊嬉の種類も決めたのである。前々號にあつた、保育事項實施程度表と、比較すればよく分る。

一、一列行進

衆兒を一行に幷ばしめ、樂器によりて拍子を取りつゝ、種々の方向に導きて歩ましむ。

行進漸く熟するに至らば、之を導きて圓形を形造らしめ、先頭の幼兒終尾の幼兒と接するに至りて歩を止め、圓の中心に向つて立ち互に手を連ねて圓を造らしめ左又は右に回轉せしむ。

二、雁

雁々わたれの唱歌に伴はしむる遊嬉にして、衆兒をして悉く雁に擬せしめ、兩手を左右に伸ばし、上下に動かしつゝ一列に揃ふて進行せしむ。或は兩手を左右に伸ばす代りに兩掌を前に揃へて上下に運動せしむることもあり。

三、てふ〳〵

てふ〳〵の唱歌に伴はしむる遊嬉にして、幼兒をして一人にて若くは二人づゝ組み合ひて蝶に擬せしめ、てふ〳〵の唱歌を唱ひながら室内を隨意に飛び回らしめ、唱歌の終ると共に室内自ら好む所のものに止まらしむ。

漸く此遊嬉の方法に熟するに至らば、衆兒をして圓形を造らしめて之を花木に擬し、蝶に擬したる幼兒を其内外に放ち置き、衆兒は唱歌しながら右或は左に廻り、蝶となれる者は手を振り動かしながら思ひ〻〻に飛び回り、唱歌の終はると共に自ら好む花木に止る、止まられたる花木は更に蝶となり蝶と入れ代はりて再び唱歌しながら遊嬉を始む。

四、雀

「おきよ〳〵ねぐらの雀」の唱歌に伴はしむるものにして、衆兒をして眼を塞ぎ兩手にて覆ひながら一所に集まり屈し居らしむ。保姆一人唱歌を唱ひ「ねぐらをいでゝ」の句に至りたる時、衆兒は一度に起き出でゝ其次の句を唱ひながら自由に飛び回り歌の終はると共に各自好む所のものに止らしむ。

此方法に熟するに至りたる時は更に次の方法に由りて行はしむ。衆兒をして圓き形を造らしめて之を樹木に譬へ數人の幼兒をして其中に入り雀の塒に眠れる狀をなさしむ。周圍の幼兒は唱歌を唱ひながら回轉し「ねぐらを出でゝ」の句に至りたる時雀は起き出づるものにして、其方法はてふ〳〵の時と同じくす。

五、蓮の花

圓形を造りて蓮の花に擬せしめ蓮の花の唱歌を唱

ひながら右或は左に廻り「つぼんだ」の句に至りて皆縮みて中央に集まり集りし儘にて又次の句を唱ひ「開いた」の句に至りて再び元の形に復へらしむ此方法に熟するに至らば數人の幼兒をして更に圓の中に入りて小圓を作らしめ花の心となりて遊ばしむ。

最初は圓を作りたる儘にて回轉せしむることなくたゞ開閉のみをなさしむるも可なり。

六、風車

風車の唱歌に伴はしむるものにして種々の仕方あり。

一、幼兒をして圓形を形て作らしめ、唱歌しながら右若くは左に回轉せしめ、水車を唱ひ始むるに至りて更に反對の方向に回轉せしむ。

二、數兒をして圓の中に更に小圓を造らしめ大圓と反對の方向に或は之と同一の方向に回轉せしむ。

三、六人の幼兒を圓中に入れ何れも兩手を伸ばし一方の手には共に心となるべき紐を握らしめ、唱歌しながら大圓に隨つて或は大圓と反對の方向に回轉す。

七、鳩ぽつぽ

鳩ぽつぽの唱歌に伴ふ遊嬉とす先づ衆兒圓を作りて唱歌す數人の幼兒は鳩となりて圓外好む所に在りて飛び回はる「ぽつぽ〳〵と飛んでこい」に至りて鳩は飛び來りて圓の中に入る、「豆をやるから皆たべよ」を歌ふ時衆兒は一樣に豆を投げやる形をなす、鳩は圓中に在りて兩手にて口を造りて豆を食ふ狀をなす「食べても直に歸らずに」以下を唱ふ時に至りて鳩は圓中にて飛行し、唱歌の終は

ると共に鳩は周圍の幼兒に止り、更に遊嬉を始むること蝶々の如くにす。

八、禮の遊

衆兒圓を作り中央に一兒立ちて周圍の或兒に向ひて其名を呼ぶ、呼ばれたる幼兒は直ちに出で來り互に禮をなして其位置を取り代へて順次前の如くにす。

九、うづまき

衆兒圓を作り然る後其一端を斷ち、此端より衆兒を率ひて渦狀に進み次第に捲きて圓の中心に達したる時は、更に反對に中心より解り始め、遂に他の一端に會して運動を止むるものとす、尙ほ此運動を續くるには他の一端より始めて前法を繰り返す

（以下次號）

相摸の子守歌

平岩繁治

大山街道飛ぶ鳥は羽が十六目が一つ一の木二の木三の木櫻五葉松柳柳の下でかいた紙をひらふて太郎さんによませませう太郎さんにやよめね—を寺の小僧によませませう次郎さんのいふ事にや雁の首をちよつ切てみかんのかんごへ入れて海の島へながしたしまの子供がひだるさうに笑たひたるけりや田を作れ寒けりやあたれあつけりやひつされひつさり虫がくひついた。

一雨はふつてきたね—外まきやぬれる背中じや子がなく飯やこげるよい〳〵。

一今がさかりの蠶時子供はみじめでないてもかまわで母さんわ桑取りに〳〵よい〳〵。

●女子高等師範學校　去月八日本校本科生の校友會を稻毛に催うせしが廿三日は通學生の爲に大宮に催うせしとの事なり▲南摩老教授は今回愈依願免官と成りぬ、數十年一日の如く汲々として教職に從事せられ、老いて益ゝ盛なりし教授の如きは教育界稀に見る所、宜しく壯年教育者の取つて以て範とすべきなり▲先月十日には附屬高等女學校の運動會を東京高等師範附屬中學校の運動場に開きたり▲同十六日には清國貝子載振殿下當校參觀せられ、附屬校園とも極めて詳細に御觀察あらせられし由なり▲父兄懇話會、附屬小學及幼稚園にては毎年春秋二回同會を開く事となれるが本年も例により幼稚園は去る十九日、小學校は本月三日より三日の開會したりといふ▲廿八日皇后陛下御誕辰祝賀式の當日午後より、例により本科生一同祝賀會を開きたりとの事なり▲今回暹羅國より派遣せられたる四名の留學女學生は、高嶺校長より其教育方を井口教授、喜多見舍監、雨森保姆に囑托せられしやにて、目下日々登校參觀なしつゝありといふ。

●華族女學校運動會　は先月十四日開會の筈なりしが雨天の爲に同十六日同校庭に開會せり、折柄の暴風終日吹き荒みたりしに係らず、例により各内親王殿下、妃殿下の御來觀を辱くし、午前九

時に始まり、午後六時無事閉會せりといふ。

●慈善音樂會　本月六日、一番町教會發起となりて、東京音樂學校に開かるべき同會は、近來稀なる腕揃ひの音樂會なるべしといふ。

●東京盲啞學校卒業式　本月九日擧行せられたり、目下同校卒業生の狀況は左記の如しと。

盲生卒業後の狀況

鍼按營業	二四	訓盲教員	八
病院按摩手	七	琴師匠	七
鍼按科專修	七	彈琴科溫習	二
家務（結婚盲女）	二	尋常科專修	一
病氣	一	死亡	四
不詳	四	合計	六七

啞生卒業後の狀況

繪畫專修	一四	裁縫專修	一〇
家事手傳	七	農業	四
家務	三	仕立職	三
寫眞師	三	風琴工	二
聾啞教員	二	友染繪師	二

指物師	二	彫刻師	二
蒔繪師	一	染織學校雇	一
陶畫師	一	印刻師	一
足袋職	一	靴工	一
未定	一	不詳	二
病氣	四	死亡	六
合計	七三		

以上の內主なるもの、收入月額平均

盲生	人員	最多	最少	平均
琴師匠	七	五〇円	三〇円	三八円
病院按摩	七	六七	一七	三七
訓盲教員	八	五〇	八	二三
鍼按營業	二四	五〇	六	一八
總平均	—	—	—	二五
啞生				
寫眞師	三	?	?	四二
風琴工	二	一六	一六	一六
友染繪師	二	一四	一〇	一二
聾啞教員	二	一五	五	一〇
總平均	—	—	—	一七

●大坂市に於ける保育大會　大坂府教育會の主催せる教育大會の保育部會は、先月五日六日の兩

日間、府女子師範學校に於て、大村同校長の部長の下に開かれたり、中々の盛會にて、兩日とも出席者三百名に近く、東京よりは湯本武比古氏高島平三郎氏出會して各一場の演說あり。夫より左の討議題に移れり。

第一號案、幼稚園に於て保育を終りし幼兒が小學校其他將來に於ける成績調査に關する方法如何（愛知敎育會提出）

第二號案、石盤畫は興味少なきを以て簡易なる切拔畫を摸寫せしめ之に彩色せしむるの可否（神戸市保育會提出）

第三號案、現今の狀況に於て幼兒入園年齡を滿四年よりとするの可否（京都市保育會提出）

右の中にて第一は委員附托、第二は各自尙研究の上報告すること、第三は三年說に決定せり

第五號案、幼稚園職員の待遇方を小學校敎員と同一にせられんことを文部大臣に建白す

第六號案、明治三十三年法律第六十三號市町村立小學校國庫補助法中に市町村立幼稚園保姆を加へ其恩典に浴せしめられんことを其筋に建議すること

第七號案、明治二十三年法律第九十號小學校敎員退隱料及遺族扶助料法を幼稚園職員に適用せられんことを其筋に建議する事

第八號案、幼稚園保姆の資格に關し小學校令施行規則第二百四條を左の通改正せられんことを其筋に建議する事

幼稚園に於て幼兒を保育するものを保姆とす

保姆は女子にして尋常小學校本科正敎員の資格を有し保育上の經驗あるもの又は府縣知事

の免許を得たるものたるべし

保姆の職務を助くるものを助手とす助手は尋常小學校本科准教員の資格を有する者又は府縣知事の免許を得たるものたるべし

第九號案、小學校令施行規則第二百五條保姆の下に（助手）の二字を加ふることに改正せられんを其節に建議する事

以上原案可決

其他遊嬉の交換、奏樂餘興等ありて、無事閉會せりといふ。蓋し此會の如きは、本邦幼稚園ありて以來の大會なるべし

●清國幼稚園　今回清國武昌に於て、創めて幼稚園を設立する運に至りしを以て、前に女子高等師範學校教諭戸野みち子女子に主任を囑托せられしより、同女子は先般既に渡航せられしが、尚其下僚保姆として、丹雪江女子他一二名も更に囑托を受けて彼國に渡航せられたりといふ。

●本會例會　本月十三日午後一時半より麴町番町小學校に於て開會、高等師範學校教授小泉又一君の演說あるべし等、會員諸君にはなるべく御來會あらんことを望む

●西藏の風習　過日西藏探驗を卒えて、無事歸朝せられたる、河口慧海師の談話は、目下各新聞に掲載せられつゝあるが、同國の民俗の奇として左の一節あり。

一般人民は主として牧畜を業となし、其食物としては麥粉に獸肉を加へ、時々一夜造りの麥酒に醉を買ひ、野菜等を食するを稀なるが、師は

入藏中一片の肉を食はず、一酌の酒を飲まず、唯だ澱粉質に食鹽を加へ專心法修に從事したるも、幸に健康を害せざりし、而して風俗習慣の奇異なるものは一々擧げて數ふるに遑なきも、一妻多夫即ち兄弟二人に一名の婦人を迎へ、若くは姉妹二人に一名の男子を招くが如きは珍しからず、又西藏人は饗應を受くる際、何れも脱帽起立して大口を開らき舌を出して最敬禮を施すの風習ありて、師は初の程は奇異に感じたりといふ。

●露國小學生徒の修學旅行　過日來烏拉西保斯德トリン倶樂部は今回同地小學生徒中學資不十分にして、兼て修學旅行等實地研究の資力なき貧學童の爲に學費を支給し、我が博覽會を機とし本邦へ修學旅行をなさしめんことを企てつゝありしが準備略完了せしにより同倶樂部員及び學校教師等約四十名監督者となり「ブラゴウエシチエンスク」市及烏拉西保斯德市小學校生徒凡六十名(男生)を率ゐ本月廿八日出發敦賀へ直航し金澤、京都を經て大坂に來る筈なりといふ。

北海道通信

●札幌高等女學校生の服裝　全校生徒の服裝は追つて一定する筈なるを先づ其第一着として長袖を廢し筒袖若くは改良服に改むべきことを勸告し女教員一同其模範を示したるに今は既に一人の長袖を見ざるに至りたりと、尤も華美なる服裝は一切嚴禁し、綿服勵行を期すれば絹布類は如何なる場合に於ても校門に入らしめざる規程なりと。

●教諭の任命　高等女學校の新教諭として女子高等師範學校卒業生中川系山田はるのの兩子は何れも四月廿五日付月俸三十五圓に任命せられたり

●女學生寄宿舍の設立　札幌區にて基督教徒發起となり、地方より遊學せる女學生のため家族的寄宿舍を設け、五月一日より十二名限り入舍せしむる由なるが、費用は一ケ月五圓七十錢にて洗湯塲其他裝飾用器具をも備付け濫費せしめさる規定なり、希望者は札幌北一條西七丁目の小山恒次郎へ申込むべしとなり、因に記す北海道教育會にても目下女學生の寄宿舍設立の件に付協議中なればこれも遠からず實施のことに至るべしと。

●北海道の移住民　本年一月以降三月二十日迄の府縣よりの移住民を調査せしが、總戸數五百三十一總人數は千五百四十八、內自作農業者は二百三十七人、小作農業者は千二百三十七人、其他未定のもの六十五人なり、其後尙續々として來道しつゝあり。

●北海道の氣候　花既に謝したれと新たに萌出づる木々の軟嫩青々と毛顫を敷き詰めたらん如き若草に乙女の戯れ遊ぶや小禽の高く低く飛び交うて囀喨たる聲を弄して春を謳へる風情、却々に棄て難く、そよと吹く春風の肌に快よく身も心も浮立つほどなり、然し旭川は雪一寸降りしとは北海にわつても物珍らしさ考せられたり。

●博覽會と北海道　北海道よりも水產物は數多出品せしが見物に出かけるものは教育者連にのみ多く、漁業家は割合に少數なりとは漁業家の目下多忙なる時季なる故ならんと思はる、今三旬を出てすして漁業家連の續々上阪するものあるならん

會報

五月十九日女子高等師範學校に於て幹事會を開き次回のことに付協議をなし又分担を定めたり。幹事山下つや君辭任に付次點者關すが君就任せられたり。

入會

愛媛縣松山高等女子校　國越八重
岩手縣紫波郡日詰　川守田きさ
大分縣大分幼稚園　伊藤とよ
新潟縣學校町二番町平原小平方　原さう
札幌區北條四五丁目一番地　石原淳
茨城縣水戸高等女子校　鈴木はな
日本橋區旅籠町二一　箱石孝藏
千葉縣千葉町市場　中西つる
岩手縣膽澤郡前澤　絹川ひろ

改姓

改清水　福田あい

轉居

愛媛縣松山高等女學校へ
宇都宮三條町八番地へ
牛込區矢來町三番地中ノ丸甲六十號松本方へ
牛込區赤城下町八十三番地へ
東京市四ッ谷第二小學校へ
茨城縣水戸高等女學校へ
茨城縣水戸高等女學校へ
福岡縣遠賀郡若松松枝町花田音吉方
京都市室町一條下ルへ

會費領收　自三十六年四月三十日至同五月二十日

一金一圓	自三十五年四月至三十六年一月	安野みち
一金六十錢	自三十六年六月至同年	雨森せん
一金六十錢	自三十六年四月至同年	近藤しげ
一金一圓	自三十七年二月至同年五月	國越八重
一金五十錢	自三十六年六月至同年	下瀨たつの
一金一圓三十錢	自三十五年十二月至三十六年十二月	關口しづこ
一金一圓	自三十六年四月至三十七年四月	奥宮てい
一金六十錢	自三十六年四月至三十六年九月	田中織衛
一金六十錢	自三十六年四月至三十六年五月	渡邊かず
一金五十錢		高木ます

山田たけ	一金二圓	自三十六年六月至三十八年一月
馬場とら	一金七十錢	自三十六年十二月至三十七年一月
松岡くすや	一金三十錢	自三十六年七月至三十七年十二月
吉田はる	一金一圓二十錢	自三十七年一月至三十七年十二月
甲斐こと	一金十錢	三十六年五月
林たま	一金十錢	三十六年五月
若尾くす	一金十錢	三十六年五月
平野みよ	一金十錢	三十六年五月
和知てる	一金十錢	三十六年五月
中川よね	一金十錢	三十六年五月
佐藤みさを	一金十錢	三十六年五月
高安吾妻	一金五十錢	自三十六年十月至三十六年十一月
伊澤丑三	一金五十錢	自三十六年十一月至三十六年十二月
俄ふみ	一金十錢	三十六年五月
木村茂枝	一金十錢	三十六年五月
木村千代	一金十錢	三十六年五月
河野きよ	一金一圓七十錢	自三十六年一月至三十七年五月
小島たつ	一金五十錢	三十六年七月
平沼みか	一金五十錢	自三十六年十月至三十六年九月
西村もと	一金五十錢	自三十六年一月至三十六年五月
高木基子	一金一圓	自三十六年六月至三十六年三月
橋本ひさし	一金三十錢	自三十六年四月至三十六年六月
進藤つる	一金三十錢	自三十六年七月至三十七年九月
安東てい	一金三十錢	自三十七年十月至三十七年十二月
木村とらえ	一金三十錢	自三十七年一月至三十七年三月
藤岡とき	一金五十錢	自三十七年四月至三十七年十二月
内田たね	一金五十錢	自三十七年五月至三十七年十二月
岩田ゆき	一金二十錢	自三十七年六月至三十七年十二月
益田一枝	一金二十錢	自三十七年九月至三十七年十二月
奈良あい	一金二十錢	自三十七年十月至三十七年十二月
奥野まさ	一金一圓二十錢	自三十七年十一月至三十七年十二月
鈴木しげ	一金三十錢	自三十七年十二月至三十八年一月
平川よし	一金三十錢	自三十八年一月至三十八年三月
加藤まつ	一金五十錢	自三十八年三月至三十八年六月
藤谷いわ	一金五十錢	自三十八年六月至三十八年九月
里村なほ	一金五十錢	自三十八年九月至三十八年十二月

フレーベル會規則

第一條　本會ハ幼兒保育ノ改良發達ヲ圖ルヲ以テ目的トス

第二條　本會ハフレーベル會ト稱シ東京ニ置ク

第三條　會員タラントスルモノハ幼稚園ニ關係アルモノ又ハ幼兒保育ニ篤志ナルモノニシテ會員ノ紹介ヲ經ヘシ

第四條　會員ハ本會ノ經費トシテ一ケ月金拾錢ヲ醵出スヘシ

第五條　令聞名望アル人ニシテ本會ノ事業ニ裨益アリト認ムルモノハ特ニ請ヒテ客員トナスコトアルヘシ

第六條　本會ノ目的ヲ達センガ爲ニ左ノ事業ヲ行フ

一　總會　毎年四月二十一日之ヲ開キ保育ニ關スル演說、談話、保育參列品幼兒成績物展覽會　會務ノ報告、幹事ノ選擧等ヲナス會日ハ會長ノ意見ニヨリ之ヲ變更スルコトアルヘシ

一　常會　毎年二月、六月、十月、十二月ノ第一土曜日之ヲ開キ保育ニ關スル演說、談話、協議、實驗等ヲナス

一　組合會　會員中特ニ或ル事項ヲ研究セントスル者ヲ以テ組織ス但シ別ニ組合會規約ヲ定メテ會長ノ承認ヲ經ルモノトス

一　雜誌發行　毎月一回雜誌ヲ刊行シ之ヲ會員ニ配布ス

一　前項ノ外本會ノ目的ニ裨益アリト認メタル事件

第七條　本會ニ左ノ役員ヲ置ク

會長　一人　會務ヲ總理ス

主幹　一人　會長ヲ補佐シテ會務ヲ掌理ス

幹事　十人　會長ノ指揮ヲ受ケ會務ヲ分掌ス

評議員　若干人　重要ナル事件ニ關シ會長ノ諮詢ニ應ス

第八條　會長ハ客員中ヨリ推薦スルモノトス

第九條　主幹ハ會長ノ特選トス

第十條　幹事ハ會員ノ互選トシ其任期ヲ二ケ年トス

但シ毎年半數ヲ改選スルモノトス

第十一條　評議員ハ會長ノ特選トス

第十二條　本會ハ必要ニ應シ特ニ委員ヲ設ケ又ハ書記ヲ雇入ルヽコトアルヘシ

第十三條　此規則ハ會員三分ノ二以上ノ同意ヲ得ルニアラサレハ變更スルコトヲ得ス

謹告

一、原稿は毎月十五日までに御送附を乞ふ。

一、幼兒保育上の質疑、女子教育上の論說、幼稚園問題其他各地教育の狀況、童謠等續々御投稿を乞ふ。

一、本會に入會御志望の方にして會員の知己を有せざる向は會費前納の上直接本會あて御申込ありたし。

一、入會せずしてたゞ雜誌だけ購求せられんとする方は東京日本橋區本石町二三金昌堂へ御注文ありたし。

女子高等師範學校附屬幼稚園內

フレーベル會

○女子作法女子割烹夏季講習會廣告

官私各女學校教員及該教員志望者並に本學科研究志望者の爲に本年八月一日より凡十日間女子作法夏季講習會及女子割烹夏季講習會を東京市神田區一ッ橋通町帝國教育會内に開設す志望者は講習すべき學科及住所氏名を記して來七月二十五日迄に大日本禮節學會内夏季講習會事務所へ申込むべし

大日本禮節學會第二回女子作法夏季講習會要項

一講習學科《本年三月文部省訓令高等女學校作法要目を實修せしむ》○座作進退○應對○受授進退○寢食服裝○訪問迎接○通信贈答○饗應公會○吉凶慶吊○忌服等の實習及心得

一擔當講師　日本式《帝室流》軍人式《伊勢流》德川式《小笠原流》明治式《臣民流》　禮節家　石井泰次郎君

《本會第一回は昨三十五年八月開設し實地應用教授法を講ぜしが未だ世間の作法教授法を一定するの要を得ず是高等女學校科目の一定の標準の完全せざりしに由る所多かりしなり然るを幸にして本年三月文部省令に高等女學校作法教授要目を一定して發表せられたるは實に舊來の作法に於ける無用の旧風を一掃すべき時期を與へられたるなり同訓令に《現時の衣食住の情況に適合せしめん事に注意し座禮立禮を併せ授け實際に應用せしめん事を要す作法の實習は簡易なる方法に依り日常卑近の事項に限るべし》と掲げられぬ之本會の主旨とする所なれば舊て舊事の虚禮を廢し明治式の臣民流を以て同訓令に《故禮故實に拘泥せず》とあるを守りて第一第二第三第四學年に對する作法教授法の學科を組織せんとする教員諸氏の爲に第二回女子作法講習會を開設し併て本學科の專門教師の高に教授上の便益を計らんとす乞ふ進で參會して講習の實務を擧げられんことを希望す

大日本割烹學會第一回女子割烹講習會要項

○學科　泰西割烹學校教授法によりて日常卑近の諸種の料理法を講習す　料理師範　八世　石井治兵衛君　石井泰次郎君

○講師

一證明書　出席の度數を驗して授與す

一講習料　左の割合に由て前納すべき事《作法と割烹を二科に分つ午前午後に分つ》

一學科講習者　金貳圓　二學科兼習者　金參圓五拾錢

但本會員《第一回作法講習會々員其他禮節學會々員》及大日本割烹學會々員は特に講習料五分の一を減ず

一講習申込書　《用紙牛紙》

私儀貴會開設の夏季講習會《女子何々》講習致度此段申込候也

明治三十六年　月　日

府縣　町村　番地

何某女　何　誰

之　年月日生

大日本禮節學會御中

○婚禮技藝講習會

女子作法教師及同志望者の爲に八月十三日より七日間婚禮技藝講習會を開設す《會場右同志望者は來八月五日迄に本會へ申込まるべし》

○婚禮技藝講習會要項

一學科○實用組結○裝飾用紐結○實用紙折形○裝飾用紙折形○普通婚禮式實習及心得《結納式○進物包形水引懸方實物雛形》《婚禮式○神前床飾女蝶男蝶雛子蝶化形銚子飾長熨斗包樣略膳部拵方》《諸祝物包形《金銀包末廣包豆の粉包胡麻贈包其他實物》現今に應用すべき古式及明治式に依て講習す

一證明書及申込式右に同じ

一講習料　金參圓《會員は五分の一を減ず○作法又は割烹兼習者同上》

講習に要する實物製作原料品は自弁たるべし

明治三十六年五月

東京市京橋區鈴木町十一番地

大日本禮節學會内

夏季講習會事務所

◀六月一日發行◶

口繪

●私立東京女學校開校式●赤堀峯翁の風景●故戸田忠敞翁の肇蹟●米壽園遊會●京都等持院●清國杭州

重要目次

●家庭の藏書……社說
●女子教育に於ける希望……野口保興
●觀劇と其利害……前田長太
●マリー、テレス、ルイズ……石川野花

女鑑

毎月二回同日十五日發行

第拾參年第拾壹號

●家政學講義……磯部武者五郎
●婦人の心得……土肥羊二郎
●螢の話……清水橘村
●經濟と婦人……佐藤天風
●名婦の墳墓……內田茂文
●文字の讀方……林恒山
●大阪博覽會見物……水主青眼
●小說綠不綠……幸田露伴
●其他文林、教の庭彙報等

一部拾錢
六部五拾七錢
拾二部壹圓拾錢
廿四部二圓拾錢
全國無遞送料

少女讀本

雪之卷
月之卷
花之卷（全部完成）各定價拾八錢郵稅四錢

華族女學校講師大宮兵馬著

中等日本文典

全一冊 總クロース美本 定價五拾五錢 郵稅八錢

●本書は、文典初步及文典の二冊を以て合本とし、中學程度の教科用に供せんとす。書中編述の事項は現今の普通文に向ひて、直に之を應用せしむべき方法を以て各條を規定し併せて之を通俗言語と比較して其差異ある諸點をも會得せしめんと務めたり。其程度配置の如きは著者が授業上の經驗を以て基礎とすと雖もまた明治廿五年二月發表の中學校教授要目にも準則すること勿論なり、委しくは本書を閱讀して知るべし。

大宮兵馬著

國語漢文假字遣法

全一冊 定價金拾八錢 郵稅金二錢

●本書の特色は各種の語に就て其發音と假字遣を授くるに從來の如く生徒をして強て暗記せしめず別に新案を以て語原語意によりて自ら推理して會得せしむべき方法を用ゐたり。

東京築地二 株式會社 國光社

電話 新橋 八八番 二六九三番

國文科講習參考書

駿臺雜話註釋 關儀一郎註釋 文學博士萩野由之序 落合直文閲、中邨秋香序 栗島山之助、井上覺藏著 正價金五錢 郵稅八錢

大和物語詳解 郵價四十五錢 郵稅六錢

國學院講習會講義 郵價六十五錢 郵稅八錢

神皇正統記講義 今泉定介著 郵價六十錢 郵稅十錢

更科日記講義 大塚彥太郎著 正價三十錢 郵稅四錢

徒然草講義 伊藤平圖著 章講述 賣價四十五錢 郵稅十錢

土佐日記講義 今泉定介講述 正價二十錢 郵稅二錢

太平記註釋 文學博士萩野由之校補 和本七冊 正價金四圓 郵稅廿錢

落窪物語講義 中邨秋香述 三冊 正價三圓三十錢 郵稅廿五錢

紫式部日記講義 三木氏編 正價三十錢 郵稅六錢

古今和歌集講義 增田于信 生田目經德兩氏講述 新註 全二冊 四百餘頁 賣價六十錢 郵稅十錢

枕の草紙詳解 文學博士黑川眞賴 飯田武鄉兩氏校閲並序 松平靜著 全三冊 價一圓卅五錢 郵稅廿四錢

十六夜日記講義 三木氏講 正價三十錢 郵稅四錢

方丈記講義 今泉定介講述 正價二十錢 郵稅四錢

畠山健講述 百人一首講義 正價十五錢 郵稅二錢

竹取物語講義 今泉定介 賣價二十錢 郵稅四錢

伊勢物語講義 今泉定介先生講述 賣價廿錢 郵稅六錢

御伽草子 畠山健校 正價七十五錢 郵稅十八錢

御伽草子 今泉定介 文學博士萩野由之輯 新 正價七十五錢 郵稅十錢

保元物語講義 三木氏述 正價七十錢 郵稅十錢

平治物語講義 今泉定介述 上下冊 正價八十錢 郵稅十錢

平家物語講義 今泉定介講述 全六冊 正價各金五十錢 郵稅各六錢

東關紀行 全部帙入美裝 金三圓卅錢 郵稅貳拾錢 畠中辻橋述 郵價卅五錢 郵稅四錢

國史學の栞 文學博士小中村著 正價五十錢 郵稅六錢 宛

動詞形容詞活語集 懷中本 正價三十錢 郵稅二錢

日本俗語文典 松下大三郎著 三版 正價八十錢 郵稅十錢

正文章軌範講義 全二冊 賣價五十錢 郵稅十錢

論語講義 花輪時之助先生講述 上下 正價七十錢 郵稅十錢

孟子講義 深井鑑一郎講述 二冊 正價七十五錢 郵稅十錢

出版所 東京 電話本局 田町 四番 神田 鍛冶 九四九 誠之堂書店 購誰客著 誠書堂之 出版名指 と

(婦人と子ども第參卷第六號)
(明治三十六年六月五日發行(毎月一回五日發行)
明治三十四年二月六日內務省許可
明治三十四年一月廿八日第三種郵便物認可

◎◎空前の唱歌良教科書!
◎檢定濟生徒用唱歌教科書の嚆矢
文部省檢定濟

唱歌教科書

郵稅一册に就き金四錢

(教師用 全四册)
第一卷定價金三十錢
第二卷定價金三十錢
第三卷定價金三十錢
第四卷定價金三十錢

(生徒用 全四册)
第一卷定價金三十錢
第二卷定價金十五錢
第三卷定價金十錢
第四卷定價金十八錢

發行以來唯一の完全なる唱歌教科用書として非常なる大喝采を博し僅々數月間に會して三版發行の盛運に今回其本書は生徒用教師用共文部省の檢定を經て更に其眞價を發揮するに足るべし

從來文部省檢定濟と稱して世に利行せる教師用の參考書として許可せられたるものにして生徒用即ち眞の教科用書として檢定を經たるものは實に本書如何に最完全を知るべし

歌集は皆悉く教師用の參考書と

● 洋琴 金參百圓以上 貳千圓迄 各種

● ヴァイオリン 鈴木製 金五圓以上五拾圓迄 八圓以上百五拾圓迄 各種 舶來品

● 樂隊用樂器 大太鼓金貳拾圓以上小太鼓八圓半以上シンバル金四圓以上其他バス、バリトン、テナー、アルトコルネット、トロンボン等金貳拾圓以上百六拾圓迄

● 鼓隊用樂器 太鼓金貳拾圓以上 横笛金壹圓以上 ○學校用一組拾參圓

● 手風琴 金貳圓五拾錢以上參拾圓迄 各種

● 山葉風琴 保險附 定價金拾六圓五拾錢以上金貳百圓迄

○右の外兩用風琴、吹奏琴、ハーモニカ、フラジョレット其他各樂器並に和洋音樂附屬品各種

● ピアノ、オルガン 調律修繕

● 郵券貳錢御送附 目錄進呈

東京市京橋區竹川町十三番地 共益商社樂器店 (電信略號ヨキ)
電話新橋五百廿九番